

創作童話作品集

宇都宮
雷都物語
らいと
ものがたり



●宇都宮商工会議所●

宇都宮雷都物語

「創作童話」

入選作品集

宇都宮雷都物語は、宇都宮市に伝わる民間伝承を基に、現代の創作童話として再構築されたものである。この物語は、雷都という架空の都を舞台とし、その歴史と文化の向上を目指す人々の奮闘を描いている。物語は、雷都の創始者である雷都王の伝説から始まり、その子孫が雷都の繁栄と文化の発展のために努力する姿が描かれている。この物語は、子どもたちに雷都の歴史と文化を伝えるだけでなく、創造力と想像力を養うための良作である。

人語新編集

「噂言童話」

宇都宮雷都物語

ご あ い さ つ

宇都宮商工会議所
会頭 藤井清

宇都宮商工会議所では、当地域の食品のブランド化を推進することによって、食文化の向上とイメージアップを図るために食品業界若手交流会を組織し、宇都宮でつくられる名産品で、地域イメージを感じることできる「統一商標」を、開発しようと研究を重ねてまいりました。平成五年に「宇都宮雷都物語」とする統一ブランドネーミングを誕生させました。

平成五年十一月には、十一事業所が参加による十二品目数で販売を開始し、以来次々と新しい商品を開発してまいりましたが、さらに統一ブランドネーミング「宇都宮雷都物語」を全国に向けて発信すべく、関係機関のご協力のもと多種・多様なイベントを企画し、各種事業に取り組むなど、雷都物語発展のため邁進しているところでございます。

これらの事業といたしまして、今般「雷都物語」に関連した「創作童話」の募集をいたしましたところ、アメリカ・イギリスの海外を含め全国各地から、七五三編にもおよぶ応募があり、大変な反響をいただきましたことは、童話募集を通じて全国の人達との「こころのふれあい」を実現することができ、この事業が「人づくり」「まちづくり」としての布石になったこ

とと痛感いたしております。

今回の事業にあたり、関係諸機関・創作童話審査委員、並びにご協賛いただきました方々のご尽力に対しまして、深甚の謝意を表しますとともに、益々のご発展を祈念いたしております。

平成八年二月

（以下は非常に薄い文字で印刷された謝辞や関係機関のリストが読み取れない）

会 員 謝 辞
宇 浦 官 田 工 企 業 池

目 次

小学生の部

雷ごっこ	千葉県松戸市八ヶ崎第二小学校六年	橘川春奈	1
かみかみは	兵庫県西宮市上甲子園小学校一年	中野雄介	4
かみなりゴロリンの一生	青森県八戸市鮫小学校六年	五林麻美	7
雷様の赤ん坊	栃木県宇都宮市陽南小学校五年	見立亮	10
ふわふわのかみなり	栃木県宇都宮市横川東小学校六年	松崎恵里	13
なみだをなくしたタンポ	栃木県宇都宮市陽光小学校三年	工藤千恵美	16
十二月の雷	栃木県宇都宮市西が岡小学校五年	深澤徹也	19
おばあちゃんからのおくりもの	栃木県宇都宮市昭和小学校六年	藤田志保子	22
七色の雫はた・か・ら・も・の	栃木県大田原市薄葉小学校五年	大久保裕美	25

中学・高校生の部

竜也の黄色いたいこ	三重県鈴鹿市日本放送協会学園高等学校一年	久保田麻子	28
カミナリタクシー	福岡県福岡市西福岡高等学校三年	松尾武志	33
奇跡の雷光	栃木県宇都宮市若松原中学校三年	佐々木瑠理子	37
とべ、白い月のひこうき	福島県福島市福島高等学校三年	小野誠	41
雷都村の夏祭り	栃木県宇都宮市国本中学校二年	高橋麻実	45
心の虹	栃木県足利市足利西高等学校二年	板鼻孝子	48
雷都物語	栃木県那須郡烏山町	上田安子	51
雷神の宝玉	栃木県宇都宮市陽北中学校三年	加藤淳平	56

一般の部

未来の動物園	静岡県御殿場市	小林美佳	60
半ぞうと神さんの木	千葉県野田市	山口理	66
ペカッとゴロンゴロ	兵庫県西宮市	平田あけみ	72

石の上にも三年	東京都三鷹市	奥山宗弘	77
お父さんは虹男	埼玉県草加市	福野武	83
まんじゅう屋さんとおへそ	愛媛県川之江市	木村真理	89
三太とゴロ太	栃木県鹿沼市	大橋光子	95
米を盗んだ雷様	福島県二本松市	菊田智	101
ソフトクリーム屋のおじいさん	大阪府豊中市	原見志保子	107

創作童話審査員・実行委員会

宇都宮雷都物語 創作童話協賛企業

「ぼくも、雷になりたいなあ。」
と思っていたんだ。

ある日、雷のパーティーがあつて雷みんなが集まつたんだ。ピカドンが、ふわふわに「ふわふわもおいでよ。雷の神様に雷にしてもらえようにたのんであげるからさ。」

と言つたので、ふわふわは、パーティーに行つてみた。すごい、すごい、ものすごい音がする。雷みんながタイコをたたいておどっているから大さわぎ。地上では大雨。雷の神様は、ピカドンからふわふわのことをきくと、

「ワハハハハ。雷なんかならない方がいいぞ。人間にきらわれるぞ。人間は、おれ様たちが『へそ』をとつて食べると思つているんだぞ。やめろ、やめろ、雲の方がよほいいぞ。」

と言つて雷になかなかさせてくれない。それでもふわふわがたのんだら、神様のタイコをかくしてくれた。力をいれなくても音がでる。ふわふわでも、たたけるタイコだ。ふわふわは、さっそくたたいたよ、神様のタイコを。うれしくてたまらないふわふわは、夢中になつてずっと、ずっとたたいていた。大変なのは地上だ。川があふれ、山がくずれ、家がこわれている。雷の神様が言つた。

「おい、ふわふわ、もうやめろ。人間たちが大水で困っている。畑や田んぼや山の木は、もうたくさん水をすつていい気もちになっている。これ以上は、人間を困らせるだけだ。」

ふわふわは、疲れた。タイコをたたくのが、こんなに疲れるとは思わなかつた。パーティーか

ら帰る時、雷の神様がふわふわをよんだ。

「もう雷になりたいなんて思うなよ。なりたくなつたら、これをたたきなさい。雲の体をたたいてもやぶれないやさしい肩たたきだ。これで、雲のおじいさん、おばあさんの肩や腰をたたいてあげなさい。それがふわふわの仕事だ。『雷ごっこ』と思つてやると、きつと楽しいぞ。元気だな。ピカドンと仲よくな。」

それからのふわふわは、毎日『雷ごっこ』と思つて雲のおじいさん、おばあさんたちの肩たたきをしているんだつてさ。



『かみかみは』

兵庫県西宮市

上甲子園小学校 一年

中野 雄介



ゆうちゃんのぐらぐらしていた下のはが やつとぬけました。ゆうちゃんは、おかあさんと
いっしょに外へでて 屋根に向かって、自分のぬけたはを思いつきり、なげました。

『ねずみのはとはえかわれ!』

はは、いきおいよく空へまいあがりました。

『よかったわ。明日は ゆうちゃんの7さいのたん生日、よいきねんになるわね。』

『うん。』

しずかな夜。ゆうちゃんは ワクワクしながら明日のプレゼントを楽しみに早く、ベッドに
つきました。

(かみなり)

”ドンドコドンドン・ドンドコドン“

太こをたたいているような音、そして、パツと空があかるくなったよう……。

ゆうちゃんは、ベッドから おきあがろうと

『あっ、かみなりぼうやかい?!』

よんだのは、トナカイでした。

『さあ、早くぼくのせ中につて……、ゆうちゃんの小さなはが、ぼくらの住んでいる
お空までとどいたんだよ……。』

いつのまにか、ゆうちゃんは、トナカイのせ中につて夜の空をとんでいました。今までみた
ことがない空には月と星がキラキラ。

『ぼくらつてだれのこと? トナカイさん。』

『ゆうちゃんの つくえの上につている動物たち全部だよ。きょうは、ゆうちゃんの、たん
生日だろう。パーティをすることにしたんだ。』

『ゆうちゃん、7さいのたん生日、おめでとう!』
ネズミがいました。

『いつもぼくたちを 大せつにしてくれてありがとう。』

みんなもいっしょにいました。空のテーブルでは、太こでたたいて”ハッピーバースデイトゥ
ユー“のコーラス……それに ゆうちゃんのすきなものでいっぱいでした。

『そうら、プレゼントだ、ゆうちゃん』

ゆうちゃんが みてみると、ライオンの 大きなはでした。

「ほく、みたいな、じょうぶで、きれいなはになっておくれ。ゆうちゃん。」

「どうもありがとう。」

お星さまが キラキラとわらっていました。

夜あけまえ、ベッドでねていたゆうちゃん。また「ゴロゴロ」という大きな音に、びっくりし、「ピカッ」とひかりかがやいたところに ちかづいてみたのです。いつものように、つくえの上には、ぬいぐるみの動物たちが、ちゃんとわらっていました。

「すてきな、バースデイ会、ありがとう。」

小さな声でいいました。

それから、一カ月たった日、ゆうちゃんがかおをあらおうと かがみをのぞいてみるとプレゼントしてもらったはがみえたのです……

小学生の部

優秀賞

「かみなりゴロリンの一生」

青森県八戸市

鯨小学校 六年

五林 麻美



ここは雲の上。今日も、次々とかみなりの子供が生まれています。その中に、黒くて大きな目をした男の子がいました。名前を、ゴロリンといました。

雲の上のかみなりには、1つだけ、きまりがありました。それは、かみなりを5回ならしたら、生まれ変わることでした。

やがて、ゴロリン達が、地上へおりていく日がやってきました。ゴロリンはこの日を、首を長くして待っていたので、だれよりもはやく地上へおりて、

「ピカーゴロゴロ」

「ピカーゴロゴロ」

と、かみなりを二回もならしたのでした。

「あと三回か、どこでならそうかな……そうだ、海という所へ行ってみよう。」

ゴロリンは、海がきれいということ、友達から聞いたので、行ってみたかったです。やがて青くてきれいな海が見えてきました。

「あれが海か、きれいだな。」

ゴロリンは、海がとても気に入りました。ここで、生まれ変わろうとも決めました。ふと、辺りを見回すと、砂浜で、人間の女の子が、一人で遊んでいます。

「君は何をしてるんだい。」

ゴロリンが聞くと、

「貝がらを集めてるの。」

女の子は答えます。続けてゴロリンは、

「ぼくはゴロリン。友達になろうよ。」

女の子は、びっくりした様子で、

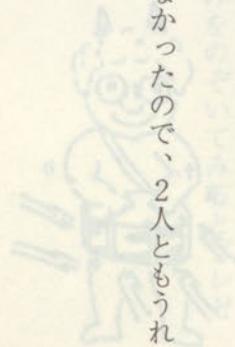
「いいの、私と友達になってくれるの、ありがとう。」

ゴロリンは、始めて友達ができて、女の子も、今まで友達がいなかったもので、2人ともうれしそうです。

ゴロリンは、女の子を喜ばせようと、

「ピカーゴロゴロ」

「ピカーゴロゴロ」



と、二回もかみなりをならして見せてやりました。

「わあ、すごい。」

女の子にほめられると、ゴロリンは、うれしくて赤くなりました。

楽しい一時でした。もう、5回目のかみなりをならして、生まれ変わらなければなりません。

ゴロリンは、決心して女の子に、

「ぼくは、5回かみなりをならしたら生まれ変わらなきゃならないんだ、次はきつと、人間に生まれ変わるよ。さよなら、いっしょに遊んでくれてありがとう。」

女の子が何も言えないでいると、「ピカーゴロゴロ」

そのしゅん間、ゴロリンは、ふっと消えました。女の子は、いつまでも泣いていました。

何日かたって、女の子に弟が生まれました。黒い大きな目、ゴロリンそっくり。女の子は、

「ゴロリン、また海で遊ぼうね。」

と、つぶやきました。



『雷様の赤ん坊』

栃木県宇都宮市

陽南小学校 五年

見立 亮



まず初めに、ほくの名前はケン太。十一歳。五年一組。ほくの担任は、桜田先生。こわい男の先生。

ある日の事。そのこわい先生の授業を受けている時だった。学校の屋根をつき破って白い大きな球が落ちてきた。その球がパカッとわれて、中から赤ん坊が出てきた。とつてもかわい
い赤ん坊だ。だがちよつとおかしいのは、きばが生えているのと、はだの色が赤い事だ。赤ちゃ
んだからと言ってはだの色は赤くなくてもいい。

少したつてからほくは、桜田先生に、

「育てて見ませんか。」

と言つたら他の子達も、

「育てよう。」

と言つてきかなかつた。

「だめだ、だめだ。」

と先生は言つた。すると、

「親が見つかるまでならいいですか。」

とおそろおそろ聞いた子がいた。先生はうなつて考えていたがOKをやつと出した。

校長先生からもOKが出た。うちの学校の校長先生は少し変わつてゐる。その変わりよつで、
たびたび助けられた事もあつた。

夜は先生の家に赤ん坊を連れて行つてもらふことにした。

ほく達は、五校時に赤ん坊の親さがしのポスター作りをした。それをみんなで割当てて、翌
朝張りながら登校した。

ある日、赤ん坊が泣きやまなかつた。その時いじめられつ子のかよ子が、

「これは、オムツがぬれてるのよ。かえなくちゃだめよ。」

と言つた。ほくはよく知つてるなあど少し見直した。かよ子は、みんなからきらわれ、仲間はずれにされていた子だ。だがこんな良い所もあつた。人は、だれでもいい所はあるんだなあと思つた。

それから半年ぐらゐして、図書室で調べ物をしてゐると、日本の伝説という本をかた手に持つた子が大声でみんなをよんでいる。ほく達はかけよつた。すると、ひらいてあるページには雷

様の絵がのっていた。その絵は赤ん坊とそっくりなのだ。あの赤ん坊は、雷様の赤ん坊だったのだ。ぼくたちは、雷様の赤ん坊を空の上に返す方法を必死でさがしてとうとう見つけた。それには、七月六日の午後七時、雷神が雷山に降りると書いてあった。雷山とは、近くの小さな山の事だ。

ぼくたちは、山の頂上に行つて時間になるのを待った。時計の針が七時をさすと、赤ん坊が空中に浮いて空にふわふわ登つていつて空に吸いこまれるように消えて行つた。

ぼく達は、赤ん坊が見えなくなるまで見送っていた。その時泣きべそをかいている子もいた。ぼくは「桜田先生の良い所やかよ子の良い所を教えてくださいありがとうございます。」と心の中で言つて雷様の赤ん坊とおわかれした。

小学生の部

佳作

『ふわふわのかみなり』

栃木県宇都宮市

横川東小学校 六年

松崎 恵里



ぼくには三つ上のお姉ちゃんがあります。綿みたいなかみの毛で、ひまわりのような笑顔をするぼくのお姉ちゃんは、怒ったことはいません。本当です。

十二月の雪の日、ぼくは友だちのひろしくんを家に招き、一緒に絵本や童話を読んでいます。じゅうたんの上にねころんで、あったかいココアを飲みながらお姉ちゃんの本で読書パーティー。ぼくもひろしくんもすっかり本の世界に入りこんでいたのですが、ハッと目を覚ましたのです。ひろしくんが本にココアをこぼしてしまつたのです。

「ごめんね、ごめんね。ぼく、ちゃんと買って返すから。」

と言いながら、ココアをちり紙でふいているひろしくんに対して、ぼくは、

「大丈夫。ぼくのお姉ちゃん、全然怒らないからさ。」

とはげましたんです。けど、ココアはしみになってしまい、いよいよ取れなくなつてしまいま

した。それでもしみを取ろうと、ちり紙でふいていると、紙がボロボロになってしまい読めなくなってしまう。まあ、お姉ちゃんは怒らないからあやまれればいいか。

四時ごろになると、お姉ちゃんが帰ってきました。ほくが、

「ひろしくんがね、ココアこぼしちゃったの。いっしょうけんめいふいたらね、こんなになっちゃった。エヘヘ。ごめんね。」

とひまわりの笑顔に対応してほくはあさがおの笑顔で話しかけたのです。なのに、

「なんでわたしの本読んだの!?! 借りるのならもっと慎重に扱うべきじゃないかしら? それに、その本。意味あって大事な大事な絵本だったんだから!」

話によればこの本は自分と同じ名前の女の子が主人公で、とっても心が美しい女性になるというお話なのだそうなのです。お姉ちゃんが四つの時に買ってもらった本で今はどこを探しても売っていないそうです。

初めてお姉ちゃんに雷を落とされたほく。でも、お父さんやお母さんのようにトゲトゲの雷とはちがつて、うーんそうだなあー、お姉ちゃんのかみの毛のようなふわふわの雷って感じ。お母さんたちの雷にはいつも反発ばかりしてるのにお姉ちゃんの雷に反発しても出ないなあ。どうしてだろう。

寝る前、今度は真面目に謝りました。ごめんなさいってー。お姉ちゃんはいつものひまわりスマイルでほくを許してくれました。

ほくは人間が出す怒りの雷も、雲が出す電気ビリビリの雷もどちらもこわいものって勝手に決めていたみたい。どっちとも悪いものじゃないね。ほくも一つ、大人になったかな?



小学生の部

佳作

『なみだをなくしたタンポ』

栃木県宇都宮市

陽光小学校 三年

工藤 千恵美



ドーン!

雷が鳴りひびきます。雷が大きらいなタンポは、ふとんをかぶってべそをかきました。でも……あれ?

べそをかいているのに、なみだが出ません。

「どうしてなみだが出ないのだろう。」

ふしぎに思っていると、大切に使用していた消しゴムのゴムざえ門が、

「きつとどこかになみだを落としちゃったんだよ。いっしょにさがしに行こう。」
と言ってくれました。

雷がやんで空が晴れてきたので、二人はなみだをさがしに出かけました。歩きながら、道ばたの草のかけを見ました。いつもおかしを買うお店にも行ってみました。公園のすべり台やプ

ランコ、鉄ぼうの周りもさがしました。ゴミ箱の中もよくのぞきました。

見つかりません。

野原まで歩いてきた二人は、丸太を見つけてすわりこみました。

「ふうー、なかなか見つからないね。」

「エーン、エーン、いたいよー。」

二人が野原を見回すと、うさぎが足をおさえて泣いています。どうやらとげがささっているようです。

「ほくがぬいてあげるよ。じつとしてね。」

タンポはやさしくとげをぬいてあげました。

「ありがとう。」

お礼を言ったうさぎは、タンポたちといっしょになみだをさがしに行くことになりました。

野原をぬけて森にやってきました。三人がなみだをさがしてほらあなの近くを通りかかると、

「拾った、拾った。だれかのなみだ。」
と小さな声が聞こえてきました。ほらあなの中から聞こえます。タンポがのぞくと大きな大きなまがねていました。

「拾った、拾った。だれかのなみだ。」

ほらあなのおくから声は聞こえてきます。

「こんな所、こわくて通れませんよ。」

うさぎが言いました。

「あきらめようか、タンポ。」

ゴムざえ門も言いました。

「いいよ。ぼく一人で行ってなみだを返してもらってくる。君たちはここで待ってて。」

ドキドキ、ドキドキしながらタンポはたった一人で、そとくまの横を通りぬけました。

「拾った、拾った。だれかのなみだ。」

声が大きくなってきました。どんどん進んで行くとポツカリ。明かりのついた大きな部屋に出ました。そこには一人のおじいさんがいて

「わしは神様じゃ。ここまで来られる子はゆう気のある子だ。それに、おまえはうさぎを助けたやさしい子だな。わしが拾ったなみだは、おまえに返してあげよう。」

と言いました。いつの間にか神様のそばにうさぎとゴムざえ門がわらっていました。

でも、その後もタンポは雷がなるとやっぱりふとんをかぶってべそをかいたそうです。

小学生の部

佳作

『十二月の雷』

栃木県宇都宮市

西が岡小学校 五年

深澤 徹也



12月24日のじゅくの帰り、急に雨がふって来たので、雨やどりしようと、神社の大木に向かって走った。そこに、同じクラスの、山野たけるが、先に雨やどりをしていた。ここで一人で遊んでいたようで、手にサッカーボールを持っている。

ぼくは、たけるがきらいだけど、雨にぬれるのは、もつといやだから、うで時計をみながらたけるを見ないで近づいた。時間は、三時三十分、そのとき、

「ゴロゴロ、ドックワーン。」

雷が雨やどりしている大木に落ちて来た。

あ、言いわすれたけど、ぼくの名前は、杉山光。泉小学校四年一組。

しばらく気を失っていたようで、起きるとたけるも、となりにたおれていた。回りを見わたすと、公園のようだ。時計を見ると、三時三十分、遠くのビルに『大バーゲン二千二十年』と

書いてある。

「大変だ、たける、起きろよ。」

たけるも回りを見て、びっくり、二人で少し近所を歩いてみる事にした。ここは未来のぼく達の街らしい。ぼくが、じゅくの帰りに、よく買い物をした、コンビニ、ゲルゲルがある。この店で、おやつを買う事にした。ぼくの持っていた三百円では、ガム二枚しか買えない。たけるは、たくさん物をぬすんで、

「にげる光。」

走り出した。お店の人も、おいかけて来た。すごい速さだ。とうとうぼくらは、つかまって、交番へつれて行かれた。

おまわりさんの一人はやさしくて、ぼくらにパンとジュースをくれた。もう一人のガラの悪そうな、おまわりさんは、ジロジロぼくらを見ている。

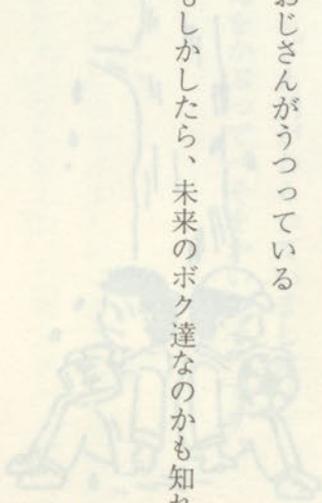
テレビ電話がなった。テレビには、えらそうな、おじさんがうつっている

「杉山光君、山野たける君、事件発生だ・・・。」

えっぼくらと同じ名前だ。二人は顔を見合わせた。もしかしたら、未来のボク達なのかも知れない。ぼくは、心ぞうが飛び出すくらいおどろいた。

交番は急に忙しくなった。

「にげるぞ、光。」



ぼくらは、すきを見てにげだした。

「つかまるな、あの大木に向かって走るぞ。」

二人は、さつきより一生けんめい走った。

雨がポツポツふって来た。大木の下に近づいた時、

「ゴロゴロ、ドックワーン。」

しばらく気を失っていたようで、起きるとたけるも、となりにたおれていた。

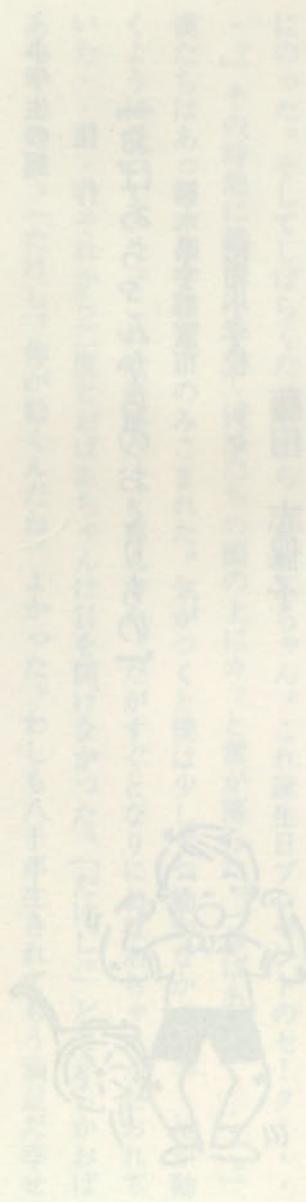
「たける。起きろよ、大丈夫かい。」

「すごい雷だったなあ。冬にめずらしいな。」

二人は、洋服のよこれをおとした。

「たける、今日家でパーティーやるんだけどよかつたら、おいでよ。」

「おれ、必ず行くよ。サンキュー光。」



佳作

『おばあちゃんからのおくりもの』

栃木県宇都宮市

昭和小学校 六年

藤田 志保子



雷都物語とはある少年が本当に体験したこと、雷の都といわれる宇都宮。農業をやっている人にとって雷は非常によいことだった。雷が地上に落ちると雷の力で作物の成長をよくするからだ。だが子供にとってその雷は厄介者だった。夏になるとあまり外で遊べないし、雷は恐ろしいし、光って無気味だ。子供たちは「雷はおっとさんより怖い。」と言った。でも僕は子供なのに雷なんてなんとも思わなかった。だって僕は体が不自由で手足を動かすことが余りできないんだ。だから外へ遊べない。いつも車椅子にすわってまどから子供が楽しく遊ぶ姿を見ていた。羨ましかった。だって僕は部屋でじっとしてろしかないんだから。いつかみんなと走りたいな。空にむかって元気に走りたいな。と毎日僕は神様にお祈りしているが、かなったことはない。あたりまえだよね世の中あまくないんだから。これで九八回目のお祈りが終わった。僕はため息をつくばかりだった。「あっそういうえば百回目のお祈りの日、あさってはおばあちゃん

んの誕生日だ。」そう、おばあちゃんは今年、つまりあさってで八十才になるんだ。「おばあちゃんには車椅子をおしてもらったり、いろいろ面倒見てくれたからプレゼント買わなきゃ。」僕はベットの横においてあるぶたの貯金箱からお金を取り出して明日お母さんに買いにいらうことにした。そして次の日、九九回目のお祈りをしおえたあと、おばあちゃんが僕の所へ来た。「たかし。元気かい。」僕はニッコリ笑って「うん。とっても元気。明日、誕生日だね。プレゼント何がほしい。」僕が質問したら少しうなずいて「たかしの手・足が動いてほしい。」といった。自分がプレゼントもらえるのに僕のことを思ってくれろなんて……。「ありがとう。おばあちゃん。」おばあちゃんは花びんにヒマワリをいれて「ちよつと用じがあるから家に帰るね。」と言って行ってしまった。ぼくはそして誕生日プレゼントも買ったしあとは次の日をまつだけだ。そして百回目のお祈りの日。僕がお祈りをしたらおばあちゃんが来て「おさん歩にいこう。」といった。急に来ておさんぼなんて変なの。僕はプレゼントを持って車椅子にのつた。そしてしばらくたってから「おばあちゃん。これ誕生日プレゼントのセーター……。」その時急に雲が出てきてぼくたちの頭の上にカッと雷が落ちた。「おばあちゃん……。」僕たちはあつというまに光にのみこまれた。気がつく僕は少しずつ動かなかった手・足が動くようになっていた。これは奇跡だ。と喜んだ。だがすぐとなりにおばあちゃんがたおれていた……。それから二度とおばあちゃんは目を開けなかった。「たけし。」どこからおばあちゃんの声。「たけし。体が動くんだね。よかった。わしも八十年生きてもう満足だ幸せ

におなり。」と言ひ声は消えた。胸が苦しくてたまんなかった。でもおばあちゃんが命をぎせいにして僕の体を動かせるようにしたんだと思う。ありがとう。そしてさよならおばあちゃん。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並んでいる）

小学生の部

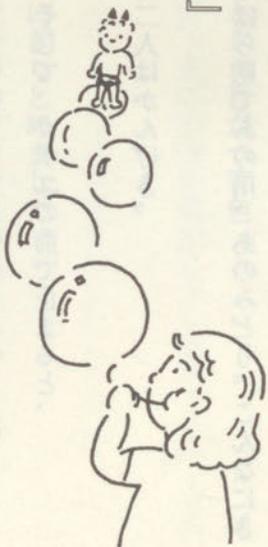
佳作

『七色の雫はた・か・ら・も・の』

栃木県大田原市

薄葉小学校 五年

大久保 裕美



カナユという女の子。ちょっと内気。シャボン玉の大好きな女の子。

今日も、木の下でいつものようにシャボン玉をふいていました。

その時、雲の上では、下から上がってくるシャボン玉を不思議そうに見ていた雷の子。

その子の名前は「ビューロン」

ビューロンは、シャボン玉に飛び乗りました。パチン、プチンとわれるシャボン玉。次から次へと、飛び乗りました。ゆっくりと下りてくるシャボン玉に乗ってビューロンは、地上に下りました。

それを見ていたカナユは、おどろいて木のかげにかくれてしまいました。

木のかげからのぞいているカナユにビューロンは思いきって話しました。

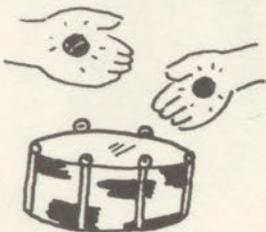
「ぼくの名前はビューロンだよ。きみの名前は？」

『竜也の黄色いたいこ』

三重県鈴鹿市

日本放送協会学園高等学校 一年

久保田 麻子



理科の時間、香は背中に三匹もカエルを入れられて、悲鳴をあげた。やったのは一郎。一郎は女の子にもてる香がキライなんだ。

「やあい、香の弱虫！ カエルが怖いんだろ」

「うるさいなっ怖くなんかないよ！」

「うそつきー」

「うそじゃないっしょうこ見せてやるっ」

そういうわけで、肝だめしをすることになったのだ。夜の学校を探検して、何かしように品をもつてくること。

香ひとりじゃ心配だったから、ほくもいっしょにトイレの窓から進入したんだけど。

「香、怖くない？」

「怖くないよ。明は怖いのか？」

「……そうじゃないけど。宇宙人がかくれてる秘密基地って、こんな感じかな」

「何もかくれちゃいないさ」

ほくたちはまっすぐ理科準備室の前まできた。ここはふだんは田中先生しか入れない。

「ちよっと、本当に入るのか？」

「もちろんさ。一郎がびっくりするようなら、しょうこ品をもつてかえるんだ」

「でも、人間の骨がおいてあるってうわさだ」

「ただのうわさだよ」

香はいきおいよくドアを開けた。電気をつけると、プーンとくさいにおいがした。

「田中先生、ちゃんとそうじしてるのかな」

「……明、見ろよこれ」

ふりむいたほくは、ビンにつめられたヘビやカエルを見た。黄色の水にプカプカういている。

「うええ、気味悪いなあ」

「オバケとかでたりして」

香が言ったとたん風の音がやんだ。……どこからかすすり泣くような声がある。ほくたちは息をのんだ。そして聞こえてきたのは……

「だれか、そこにいるの？」

「うう、うわああだあ！ オバケだあ！」

逃げようとしたぼくたちはイスにつまづいて転んでしまった。ちらつとふりかえると、そこにはオバケ……じゃなくて男の子がいた。

とても変わった男の子だ。年はぼくたちと同じくらい。黄色と茶色のしましまのTシャツを着てるんだけど、小さすぎて腹がまるみえだ。香がふるえた声で話しかけた。

「きみ、だれ？」

「竜也だよ。きみたちこそだれなんだ」

ぼくと香は順番に名前を言った。

「それで、どうして泣いてたんだい？」

「たいこをなくしたんだ。見つからなくて」

竜也はまた泣きだしそうだった。ぼくは香の服をひっぱって、小さな声でささやいた。

「かわいそうだ。探してやろうよ」

香はちよつと迷ってから、うなずいた。

「ぼくたちが探してやるよ。どんなたいこ？」

そう言うとき竜也は目をかがやかせて答えた。

「黄色くてまるくて、小さなすがついでる」

ぼくたちはまず、理科準備室と隣の理科室をすみずみまで探した。音楽室、図書室、給食室、教室もぜんぶまわったけどだめだった。

「これだけ探しても見つからないなんて、捨てられたんじゃないか。もうおてあげだよ」
つかれた声で香が言うと、竜也は下をむいた。

「だれかが拾ってもつかえたのかな」

「たいこなんかほしがるやつ、いないさ。赤ちゃんならよろこぶかもしれないけど」

たいこはどこにあるんだろう。黄色くてすずのついた、拾っても赤ちゃんしかよろこばないような、竜也のたいこ。

ぼくはひっしに考えた。

どこかの犬が遠くでクウーン、クウーンと鳴いた。まてよ、もしかしたら……

「香、竜也、中庭へ行こう！」

中庭の飼育小屋で、先週から一年生が子犬をかい始めたんだ。ぼくも見に行つたけど、人が多くてよく見えなかった。その時子犬は、黄色いボールか何かじゃれついてた……

ぼくの予想は当たった。子犬は竜也のたいこに頭をのせて、気持ちよさそうに眠ってた。

「うわあ！ あれ、ぼくのだ！ よかったあ、見つかったよ。ありがとう！」
竜也はすぐよろこんで、お札に黒っぽい小さな石をひとつづつくれた。お守りになるよ、と言つて。そしてうれしそうにたいこをたたきながら、帰っていった。

とつぜん雨がふってきた。雷もなりそうだ。家に帰るとお父さんの雷までまっていた。

次の日、ぼくと香はそっくりな青あざをつけて学校へ行った。石を見せて竜也の話をして、だれも信じてくれない。一郎もだ。

そこへ田中先生が通りかかった。

「あっ先生、この石を見てください」

「ほう、これはめずらしい。雷卵石だな」

「らいらんせき？」

「雷の卵、という意味だよ。すごいな、いったいどうやって手に入れたんだい？」

ぼくと香はだまってにっこり笑った。

いつかまた、泣き虫竜也に会えるかな。

中学・高校生の部

優秀賞

『カミナリタクシー』

福岡県福岡市

西福岡高等学校 三年

松尾 武志



青く広がる空の下、小さな雲の上に一人のカミナリ様が住んでいました。

カミナリ様は、雨をふらせるのが仕事でしたが、雨をふらせないでいい日はたいくつでしかたがありませんでした。

そんなある日のことです。カミナリ様は、雲の上でたいくつそうにねっころがっていました。が、急に、いいことを思いついたと飛び起きました。

「タクシー屋をやろう！晴れてわしの仕事がない日に、この雲を使ってみんなを運ぶんだ。たいくつにもならなくなるし、みんなには喜んでもらえるし、いいかもしれないなあ」

そこでカミナリ様は、まずは広告を作って、みんなに知らせることにしました。たくさん紙を持ってきて、マジックで大きくこう書きました。

カミナリタクシー、ほんじつかいてん。
すばやくみなさんをおおくりします。

おのりのかたは手をあげて

「カミナリタクシー」とよんで下さい。

すぐにまいります。

カミナリタクシー社長 カミナリ様

そして、それを雲の上からいろんなところにばらまいて、わくわくしながらお客さんを待ちました。

しばらくして、下のほうから、

「おうい、カミナリタクシー」

と声がしました。地上のほうをのぞいてみると、川ぎしの草のかけでカメが手をあげて立っていました。カミナリ様は、さっそく雲でカメのそばに行きました。

「へい！カミナリタクシーでい！どこまでいきやしようか？」

カミナリ様が言いました。

「この川を下ったところにある海までつれてつてくれるかな。友達の海ガメが風邪をひいてねこんでるっていうからおみまいに行きたいんだ」

「おう！海までだな。がつてんだ！」

カミナリ様は、カメを雲に乗せると、海のほうへと雲を飛ばしました。

「うわあ、いいながめだね。こんな景色、生まれてはじめてだ」

カメは大喜びです。

しばらくして、塩のかおりのする海につきました。

「おう！うみにつきやしたぜ」

「ありがとう、カミナリ様。はい、これうんちんね」

かめはそういって、きれいな川の石をわたしました。

「ほう、こいつはきれいな石だなあ。ありがとよ。またの用があるときは呼んでくれよ」

カミナリ様は、今度は雲に乗って山の方へ行きました。すると、

「おうい、カミナリタクシー」

と声がしました。地上の方をのぞいてみると、山の野原で茶色いノウサギが手をあげて立っていました。カミナリ様は、さっそく雲でそのノウサギの所へ行きました。

「へい！カミナリタクシーでい！どこまでいきやしようか？」

カミナリ様が言いました。

「月の白ウサギさんちまでつれてつてくれるかな？あんこのお団子を作れるようにあずきを持っていきたいんだ」

「おう！月の白ウサギさんまでだな。がってんだ！」

カミナリ様は、ノウサギを雲に乗せると、月の方へと雲を飛ばしました。大きな天の川をこえたり、流れ星を避けたりして、やっと月の白ウサギさんへ着きました。

「おう！月の白ウサギさんちに着きやしたぜ」

「ありがとう、カミナリ様。はい、これうんちんね．．．あれ？おかしいなあ、うんちんがない！家に忘れてきちゃったのかなあ」

ノウサギが困っていると、白ウサギが家の中から出てきました。

「どうかしました？ノウサギさん」

白ウサギにたずねられて、ノウサギがわけを話しました。すると、白ウサギは、

「ちよっと待っててください」

と、言つて家に入ると、しばらくして、たくさん白いおだんごを持ってきました。

「カミナリ様、うんちんのほうは私がかわりに払いますね。はい、これがうんちんです」

白ウサギはそういって、そのおだんごをわたしました。

「おう！こんなにたくさんおだんご、ありがとよ！また用があるときは呼んでくれよ」

カミナリ様は、地球に帰り始めました。

「さて、またお客さんはいねえかな？」

カミナリ様は、うれしそうに地球に向かって雲をとばしました。

中学・高校生の部

優秀賞

『奇跡の雷光』

栃木県宇都宮市

若松原中学校 三年

佐々木 瑠理子



ねえ知ってる？

雷には命があるんだよ．．．時には、あらゆる物を傷付け、恐怖で人をおびえさせることもあるけれど、でも、でもね知って欲しい、わかって欲しい．．．雷のほんとの気持ち．．．みんなは気付かないけれど．．．ほら、瞳を開けてごらん不思議な世界がみえて来るから．．．

あれは、ちょうど7年前の夏だった．．．その日は、とても晴れていて、空の青がとてもキレイだったんだ。父さんと母さんと僕は、夏の山にキャンプに行くことになった。山登りをしている、深い森の緑の中から、すがすがしい川のせせらぎが聞こえて来た

「父さん、母さん、川だよ、早く早く。」

「まってよー、いそぐと転ぶわよ、一輝！」

「そうだぞ、一輝落ち付け。」

父さんと母さんと僕の三人は、今晚、川の近くに、テントをはって、そこに泊まることにした。—そう、次の日あんなでき事が起こることも知らず、僕達は、魚を釣ったりして、キャンプを楽しんでいた。あっ！忘れていたけどそのキャンプには我が家の愛犬ブルーも一緒だったんだ。・ブルーは青い瞳をしたシベリアンハスキーで、僕とブルーは生まれた時から一緒に、とても熱い友情で結ばれていた。

あつという間に楽しいときは過ぎ、いつの間にか陽は暮れて、僕とブルーは、たきぎをかついでテントにもどり、夕食づくりにつせと精を出した。努力した甲斐もあつて、カレーライスの味はとても美味しいかった。夕食も終わり、僕たち家族は歌などを歌って、長い長い夜の一時を過ごした。

次の日、僕とブルーは朝食を食べた後、いちもくさんに、森へと駆けだして行った、

「おい、ブルー待ってよー。」

「ワンワンワン！」

僕とブルーは、まるで野生にかえった様に、真黒になるまで夢中になってかけずりまわったんだ。そうこうしているうちに僕たちは、川の上流の方にたどり着いた、

「おいブルー、何してんだよ、大丈夫だぞ。心配いらないよ、ほらおいで。」

「クワンクワン。」

ブルーはとても勇かんで頼もしい奴なんだけど、一つだけ弱点があるんだ。・それは水だ。ブ

ルーが小さい頃（僕も小さかったんだけど）海に行った時、僕の不注意で、うっかり海の中へ落としてしまったことがあつたんだ。それ以来ブルーは水という水が嫌いになってしまったんだ。・・情けないやら、恥ずかしいやら。そんなこんなで、僕とブルーは父さんと母さんが待つテントへ帰ることにした。・・帰る途中突然、雨が降って来た、

「山の天気は変わりやすいって父さんが言ってたけど本当だな。・・よし行くぞブルー。」

「ワン。」

そう。・・その時の雨と共に、悪夢は突然やって来たんだ。・・

「おい父さん母さん帰って来たよー。」

油断したその時だった。ガタツと言う音と共に僕の体は傾むきバランスを失い、あつと言う間もなく、雨で流れが激しくなった悪魔のような川へ落ちた。

「キャーッ！一輝っ、一輝ー！」

「母さん落ちつけ、一輝、いいか父さんが今助けてやるからな。」

父さんも母さんも、とにかく必死に叫んでいた。でも、激しく、ゴーゴーと音を響かせる自然の前では何もかもが小さくそして、大きく強い父さんでも、もう僕を助けることは、不可能なことだった。・・そして、父さんも母さんも僕も、もうダメだ、とあきらめかけたときだった。

「ワオーーン。」

ブルーだ、ブルーがそう叫んだとき、信じられない奇跡が起こった。空の雲は二つに分かれ、

その間から、まばゆいばかりの雷がブルーめがけて落ちた。僕はもうろうとする意識のなか、不思議と雷に対する恐怖なんて感じなかった。それよりも、雷光を浴びて、川にとびこんだブルーをみて、とても安らぎ安心した。何時間経ったのだろうか。それからの僕の気憶はない、母の話によると、雷にうたれたブルーは、僕をすっかり助け、自分も相当つかれ、今はぐっすり休んでいると言う。僕は感激して涙を流し、ねているブルーをしっかりと抱きしめた。そして、あの時ブルーに勇気と力を与え奇跡を起こしてくれた神様に心からお礼を言った。

ね？わかったでしょ？

雷には奇跡を起こす力があるんだよ。不思議な不思議な力があるんだ。

ほら きつとどこかであなたたちを見守っているよ。ほら、大丈夫。恐がらないでそつと瞳を開けてごらん。

不思議な光がそつと包んでくれるから。優しく守ってくれるから。

中学・高校生の部

佳作

『とべ、とべ、白く月のひこうき』

福島県福島市

福島高等学校 三年

小野 誠



みっちゃんはベッドからまどごしに見えるお月さまが大好き。どんなお花よりもきれいに見えるからです。三日月も好きだけど、やっぱり一番好きなのは満月でした。

そしてちょうど今夜は満月の夜だったので、ちよっぴりさんねん、雨がふってかみなりがなり出したのです。でも、ベッドから見るかみなりの光がとてもきれいだだったのでみっちゃんは大好きな満月が見れないのも、がまんできるのです。ゴロゴロとなりひびくかみなりの音はこわくて大きらいだったので。

みっちゃんはむしばになってしまったので明日はいしやさんのところに行かなくてはいけません。それがこわくて「いやだな」と言ったそのとき、まどの外から声がしました。

「みっちゃん、出ておいでよ。外で見るとかみなりはもつともつときれいだよ」

そしてまどにひよいとあらわれたかおは、ウサギのかおだったので。みっちゃんはおどろ

きましたが、ウサギさんが雨でぬれてしまうとかわいそうなので、まどから入れてあげることになりました。みっちゃんは、まどを開けて言いました。

「入っておいで」

大きなウサギさんは言いました。

「外のほうがかみなりがきれいに見えるよ。ほら、そこにぼくのひこうきがある。みっちゃん、空からかみなりを見てみないかい」

みっちゃんのお家のにわに、たしかにひこうきがあります。みっちゃんは、空から見たかみなりがどんなにきれいかそうぞうして、すぐに見てみたくなってしまいました。そしておもいきって言いました。

「じゃあ、少しだけ、のせてください」

「よしました。後ろのせきにのって」

そう言いながらウサギさんはヘルメットを二つ取り出して、一つをかぶり、一つをみっちゃんにかぶせました。みっちゃんはまどから外に出て、ひこうきにのりました。

「じゃあ、とぶよ」

大きなウサギさんがそう言ったとたん、ひこうきはふわりととび上がって、あつというまにくもの上にいました。くもの上は、満月の白い明かりにてらされてほんやりと光っています。

「そろそろかみなりが光るよ。ちゅういしてみていてごらん」

そうウサギさんが言ったしゅんかん、キラリとかみなりが光って、白いくもが金色にまたたきました。

「わあつきれい、まるで金色のバラの花みたいね」

みっちゃんはそう言いました。じっさい、へやのまどから見るとかみなりは一本のギザギザしたせんのようなのですが、くもの上から見るとかみなりはまわりのくもを金色に色付けるので、バラの花のように見えたのでした。それに、まどから見るとかみなりはキラキラと光って見えたのに、空から見るとかみなりはキラリと力づくかかやいて見えたのでした。

「きれいだらう。ぼくらはいつもああいうかみなりを見ているんだ」ウサギさんはちよっぴりほこらしげに言いました。

「いつもって、いつもひこうきにのっているの」みっちゃんはたずねました。

「ちがうよ」ウサギさんはヘルメットの中の真つ赤な目をニコニコとさせて言いました。

「ぼくらはあそこに住んでいるのさ。しんじられるかい」

そう言ってウサギさんがゆびさしたところには、まあるいお月さまが真つ白くかがやいていました。

「いつもみっちゃんがぼくらの月をながめてるとき、ぼくらはみっちゃんのいるこの青いほしを見つめているんだよ」

「ちきゅうは、ほんとうに青いんだ」みっちゃんはたずねました。ウサギさんは前を見て答え

ました。

「ああ。青いよ。すきとおつて、大きなほうせきみたいだ。その青いほうせきに、ときどき金色の花がさく。それが、かみなりさ」

ウサギさんはつづけます。

「かみなりは、あぶないよね。でも、昔の人が『ひらいしん』を作ってくれたから、もうあんまりあぶなくない。みっちゃんがおとなになるころには、かみなりをつかまえてでんきにして使えるようになるかもしれない。・・・そろそろ帰ろうか」

ウサギさんがそう言ったと思うと、みっちゃんはもうベッドの上で寝ていました。「今のはゆめだったのかしら」みっちゃんは思いました。そしてなぜか、明日はいしやさんのところに行くのがこわくありませんでした。

そのときかみなりがなり、少し開いていたまどから入ってきた風が、カーテンをゆらししました。

中学・高校生の部

佳作

『雷都村の夏祭り』

栃木県宇都宮市

国本中学校 二年

高橋 麻実



わしは、ずっと昔からこの村に住んでいるが、この村は住み良い所じゃ。空気は澄んでいて、川の水は透き通って、魚が泳いどる。周りの人々は温かく優しい人ばかりじゃ。でもなあ一番の自慢は、昔話が沢山あることじゃ。今日は、わしの一番のお気に入りの話を一つしようかね。

お前さん達もごんじのように、雷というものは、恐れられ、こわがられるものじゃ。が、わしらの雷というのは、他の村との感覚が、ちいとばかし、ちがうんじゃ。それは――。つい、ひと昔前のことじゃった。わしらの村の夏祭りは、毎年盛大なものじゃった。なぜなら、盆踊りのおはやし太鼓をたたくのが、人間ではなく、雷様じゃったのだから。いやあ。雷様の太鼓は、すばらしいものじゃった。なんといつても、迫力があつたからなあ。村のもんは、みんな、そんな雷様の迫力あるおはやしが、大好きじゃった。

ところが、ある年の夏祭りも近いというのに雨が少なく、作物は枯れ、田畑は乾き上がり土が

ひび割れするほどじゃった。村のものがみんな、今度のお祭りの日に、雨を降らしてくれるように、雷様に頼むことになったがどうしたことか、その年に限って、雷様が、下界に降りてこないのじゃ。村長はたまりかねて、大声で叫んだんじゃ。「誰でもよい。雲の上に行つて、様子を見てきてくれる者はおらんか。」と、いう訳で、若い医者元助が雷様の所へ行くことになったんじゃ。しかし元助は、空が飛べる訳がない。とほうにくれる村人の前に見慣れない四歳位のかわいい男の子が、ちょこちょこ進み出おつた。みんなが目をまるくしているのをよそに、早口で話し始めたんじゃ。「おらがいいこと教えてやるだ。あのな、雷都沼のほとりに、小さな小屋がたつとる。おらのばあちゃんの家だ。ばあちゃんは物知りだ。なんでも知つてらあ。」そう言うのと、その子は草の中をびよんびよん飛ぶように、雷都沼の方へと駆けていったんじゃ。村のもの全員、あつけにとられておると、向こうの方で男の子が手を降つていたんじゃ。村長を先頭に、その子の後をおいかけることにしたんじゃ。しばらく歩いて、雷都沼に着いたんじゃが、小屋は小さかつたからのお。元助が一人で行くことになつたんじゃ。中をのぞくと、向かいのゆりいすに、一人の女の人が座つておつたそう。女は、ふりむかずにつの青い毛糸玉を元助の足元に、転がしてきたそう。そして、「その毛糸玉を村で一番高い木の根元に植え、水を一適たらせば、お前の行く空まで、つれていってくれるでしょう。」とな。元助は、さっそく村で一番高いカシの木の根元に、その糸色玉をうめ、一適の水をその上にとらしたんじゃ。すると、土の中から毛糸が延びてき、元助を持ち上げて、どンドン延びてい

たんじゃ。とうとう雲の上まで行つて、やっと止まつたそう。辺りに人影はなかつたそうなのに、どこからともなく、「ウーウー。」と、言う熊のうなる様な、恐ろしい声が聞こえてきたんじゃと。ずっと向こうの方に、黒いかたまりのような物が見えたそう。元助は、おそるおそる、近づいてみると、それはあの、雷様じゃつた。雷様はお腹をかかえて、うなつておつたそう。元助は医者じゃけん、苦しむ人を見るとついつい看病してしまうんじゃ。いつも肩に下げとるカバンの中から、腹痛止めの薬草をせんで飲ませたそう。すると雷様の顔色は、もとに戻り、元気になつたそう。とつ燃、雷様は元助を背中におぶうと、雲の上から、飛びおりたんじゃと。雷都沼のほとりに着地すると、例の小屋の中に駆けこんだんじゃ。すると中から三人の鬼が出てきおつた。女の鬼がゆつくり話し始めたんじゃ。「私達は、雷家族です。」すると、子供の鬼が、「でもね、初夏のころから、お父さんのお腹が、痛くなつちやつてね、村への水まきが、出来なくなつちやつたの。」「ですから、私と息子二人で下界に降りて、みな様のたすけを借りたくて、人間の姿に化けていました。みな様には、大変御迷惑をおかけしました。これから急いで天界に戻つて、雨を降らします。」と、言い、雷家族は、空へ戻り、約束の雨を降らせてくれおつた。そのおかげで、その年の秋は、大豊作じゃつた。夏祭りも、約一カ月おくれじゃつたがもちろん行つたんじゃよ。いままでで、一番にぎやかなお祭りをね。

んつ。元助は？つて、そりゃ名医になり、弟子も沢山いるんじゃと。

『心の虹』

栃木県足利市

足利西高等学校 二年

板鼻 孝子



それはとても暑い夏の日の出来事だった。僕は同級生の浩介に誘われて蟬取りに行く事になった。本当の事を言っていると、僕は行きたくなかった。浩介にとつて僕は自分の様な存在なのではないかと、時どき思うのである。なぜなら浩介は僕に命令ばかりするからだ。要するにだから僕は行きたくなかったのだ。だけど僕には浩介の誘いを断れる程の勇気がなかった。浩介はケンカがとても強くて、だれ一人浩介に勝てる奴がいなかったからだ。自分でも情けないと思っいるが、僕は浩介が怖かった。だから僕は浩介に逆らう事など到底出来なかったのだ。そしてとうとう約束の日が来た。僕は寝坊してしまったため約束の時間より少し遅れてしまった。浩介が怒っているかもしれないと思うと、いつの間にか足取りが重たくなっていった。けれどそれもほんの少しの間だけだった。橋の所まで来ると、向こう側で浩介がほほ笑みながら大きく手を振っているのが見えたからだ。

「龍太、遅いぞ。」

「浩ちゃん、遅れてごめん。」

「さ、早く行こう龍太。」

「うん。」

僕は元氣よく返事をした。僕も浩介もいつの間にか蟬取りに夢中になっていた。僕はさつきからうるさいくらいに鳴いていた蟬の鳴き声が小さくなっていったのに気付き、辺りを見回してみた。すると空には大きくて真っ黒な雨雲が浮かんでいた。気付いた時にはもう遅かった。雨がいつせいに「ザーザー」と降り出した。僕と浩介は急いで近くの神社の中に入って、雨やどりをすることにした。

「ゴロゴロピカーン。」

雷の音と同時に空が一面に光った。おもわず僕は大きな声を出してしまった。

「うわー、おちるよ。こわいよ、こわいよ。」

すると隣りに座っていた浩介が、突然大きな声を出して笑いだした。

「おまえの名前龍太だろ、龍が雷こわがってどうするんだよ。」

「そんなこと言ってもこわいもんはこわいよ。浩ちゃんは雷こわくないの？」

少しして浩介が答えた。

「あ、あたりまえだろ、オレが雷なんかをこわがるわけないだろ。そんなに雷がこわいのなら

「オレが手をにぎってやるよ。」
そういつた浩介の声は少し震えていた。しかし僕はそのことに気付かなかった。

僕は浩介の顔をのぞきこんでみた。浩介は歯をくいしばりながらじっと下を向いたままだ動かなかった。ただ雨と雷の音だけが鳴り響いていた。一体どれぐらいの時間が過ぎたのだろうか。僕には見当もつかなかった。しばらくすると雷も雨もやんでいた。そこから草木の匂いがブンブンした。蜘蛛の巣には雨の雫がとともきれいに光っていた。空はととも青く晴れていた。僕は嬉しくなり、浩介に声をかけた。

「浩ちゃん、空がととも青くてきれいだよ。」

浩介は一瞬びくつとなり、

「ああ、そうだな。」

と、ぎこちなく、けれども少し恥ずかしそうにそう答えた。その時僕は浩介の様子が何で変わったのかによく気付いた。それと同時に僕は浩介に親近感を感じた。

僕は今、僕と浩介との間に大きな虹の橋がかかった様な気がした。

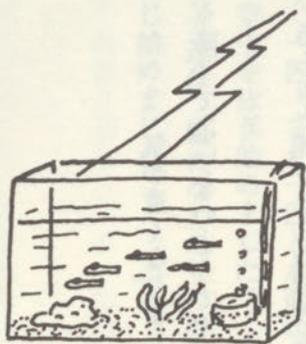
中学・高校生の部

佳作

『雷都物語』

栃木県那須郡烏山町

上田 安子



ユウスケは、もうずいぶん長い間、水槽の前に座り込んでいました。細長い四角の水槽には、たつぷり水が入れてあり、メダカが五匹、いたりきたりして泳いでいます。水槽の下の方からメダカを見上げると、きらきらとした水面の下を、尾をすいっとゆらして泳いでいる様子がわかります。

このメダカ達は、今日、川へ遊びに行ったお兄さんからいただいたのです。ユウスケは、まだ小さいので、川へはつれていってもらえません。それで、かわいそうに思ったお兄さんが、ユウスケにとつてきてくれたのでした。

お兄さんは、

「ユウスケ、ちゃんと世話をするんだよ。」

そういつて、水槽に水とメダカを入れると、また川へ行ってしまうました。お母さんも、さつ

き買物にでてしまったので、ユウスケだけがメダカと留守番をしているのでした。

どれくらいだったのでしょうか。気がつくくと、外に暗い雲がたちこめていました。さつきまであんなに晴れていたのに、今にも雨が降そうな空模様です。

「お兄さんもお母さんも、早く帰ってきてほしいな。」

と、ユウスケがつぶやいたその時、

ピカッ　バリバリバリッ

光と大きな音が、一度に降ってきました。

「うわあ。」

ユウスケはびっくりして、うずくまってしまいました。神鳴りです。ユウスケの大きらいな神鳴りです。

ゴロゴロ　ピシヤッ　ドドーン　ザ——

神鳴りは暴れまわっています。激しい雨も降り始めました。

「うわあん。恐いよう。」

ユウスケは泣きべそをかいて、しつかりと耳を手でおおって……気が遠くなりました。

ふと気がつくくと、すでに神鳴りはやんでいました。雨も、もう降ってはいないようです。

「ああ、こわかった。」

と、ユウスケが起きあがろうとした時、目の前の水槽の水面が、きらりと光りました。すると、

不思議なことがおきました。水槽に入っていた五匹のメダカが、一匹、また一匹と水面から出てきたのです。すいっすいっと、五匹のメダカは一列になり、空中を泳ぎ始めました。

ユウスケは、ぼかんとして、ただそれを眺めていました。メダカ達は、輪になったり、広がったりしてユウスケの頭の上を泳いでいきます。そして、何か話し始めました。

「僕達をこんな狭い場所に閉込めたのはだれ。」

「ひどいよ。いじわるだよ。」

「川に帰りたいよ。」

「何も悪いことをしたわけでもないのに。」

「悲しいよ。」

これを聞くと、ユウスケはとても悲しくなりました。そこで、

「そんなこと言わないで、水槽に戻ってよ。大切に飼ってあげるから。」

と言うと、メダカは、

「大切に飼ってあげる、だって。頼んだわけでもないのにね。」

「川で泳いでいたほうが、ずっといいのにね。」

ユウスケは、困ってしまいました。メダカがこんなに自分を嫌っているとは、思ってもみなかったからです。それで、

「なぜ川のほうがいいの。」

と、尋ねてみました。

「自由だからだよ、僕達は、広い場所で自由に泳ぐことができるもの。たとえ、大きな魚に見つかって食べられたとしても、僕達は幸せなんだ。」

と、メダカは言います。ユウスケにはメダカの言うことが、よくわかりません。食べられてしまつては、嫌だと思いました。すると、一匹のメダカが、じつとユウスケを見つめて言いました。

「人間には、わからないよ。だって、思い上がりだもの。」

「思い上がりって

ユウスケが聞こうとした時、メダカ達はまたすいすいと水槽に戻ってしまいました。そして何ごともなかったかのように、再び泳いでいます。

ユウスケは、また、ぼかんとしてしまいました。わかっていることは、今、自分がメダカを不幸にしているということです。

窓の外を見ると、庭の木や草花が、雨に洗われてきれいです。神鳴り雲はどこかへ消え、光が差し込んでいました。何もかもがきらきらと、すばらしい光を持っているように見えます。

その時、向こうの道をお兄さんとお母さんが、並んで歩いてくるのが見えました。二人が帰ってきたら、ユウスケは一番にお兄さんに頼んで、メダカを川にかえしてきてもらおうと思いましたが、

「だって、思い上がりになりたくないもの。」

ユウスケは、小さくつぶやきました。



佳作

『雷神の宝玉』

栃木県宇都宮市

陽北中学校 三年

加藤 淳平



今は昔、とある所に雷という名の若者がおった。その男は村一番のうつけ者で村人達にはた
いそう嫌われていた。

ある日のことだった。その日は年に一度の祭りの日で村人達は朝からせせと祭りの準備を
していたのだが、雷はいつものようにブラブラと村の中を歩いていて。村人達の視線が冷たかっ
たが、雷には祭りなど関係のないことだった。

別に雷は役に立とうなど思っていなかったし、村人達も雷になど、役に立ってもほしくな
かった。だがこれからおこる出来事は雷を大きく変えるのである。

雷はあてもなしに道を歩いていると近くには雷神を祭る神社があった。今日の祭りはこの雷
神を祭るもので雷神祭といった。

雷でもそれくらいのことには知っていたので少しだけ行ってみることにした。

出店は前年よりも多く、人もとてもにぎやかだ。雷が見て回っていると奥には神社があった。
今日は祭りということで特別に中に入ることができる。雷もとりあえずその中へと入っていっ
た。

中はヒンヤリと冷たく静かだ。これといって何もなかったがさらに奥に行くところの先行くべ
からずと書いてある立て札があった。

しかし、雷はそれを無視し、奥へ進んでいくところには小さな宝玉があった。宝玉の価値な
どわからぬ雷は投げてしまおうかと思つたがとりあえずふところの中に入れていた。

祭りの夜、村人はおどり、楽しんだ。雷もそこにいた。そして祭もそろそろ終わるころだった。
その時、轟音と共に川の堤防がくずれだした。村人達は口々に呼べんだ。

「助けてくれえつ。」

「川に、川に飲まれる。」

その時だった雷のふところの宝玉が光りだし辺りに閃光と共に雷鳴がとどろいた。

「うおおおっ」

雷は家ほどもある巨大な岩をもちあげ、川にほうり投げた。

そう、雷の体に雷神がやどつたのだ。

村人はその雷を見て口々に言った。

「雷神様じゃ、雷神様の力があのうつけ、いや、雷にうつつたのじゃ。」

だが岩一つでは流れる川の水は止められない、それでも雷は次々と岩を川に投げこんでいった。

「わしらも川をくい止めるのじゃ。」

村長がそう呼んだ。

雷と村人達は力を合わせ、なんとか川をくい止めることが出来た。

「ありがとう、雷。」

村人達は口々に雷に言った。

「……ん、ここは。」

雷は我を取りもどした。その時雷神の声が聞こえた。

「雷よ、……お前にその宝玉をたくす、その力で人々を救い、世のたに力を使うのだよいな……。」

雷鳴が止み辺りには雨が降り始めた。雷はしばらくそこに立ちつくしていた。

次の日の朝、雷は何も言わずに旅に出た。そして村人達は雷の安全をいのり、神社に雷を祭った。

そして二年後——。

村へ帰って来た雷はうつけの雷ではなく立派な青年となった雷であった。村人達は今までの冷たい態度ではなく、喜んで雷を迎えた。

村人達は時おり雷の良いうわさを聞いていたせいか、雷に村長をやってくれとたのんだ。

しかし、雷は村人達にこう言った。

「私は今までうつけと呼ばれ、たくさん迷惑をかけてきました。それに、私にはまだやる事が残っています。だから村長にはなれません。」

村人達は少し残念がったがそれでも雷に、祝の祭りを開いた。

その晩、雷は一人で神社に行き、そつと宝玉を元の場所にもどした。

そして心の中で雷神にこう言った。

「雷神様……私は今まで宝玉のおかげで人々を救うことが出来ました。でもこれからは自分の力で世のため、人のため、働こうと思うのです。」

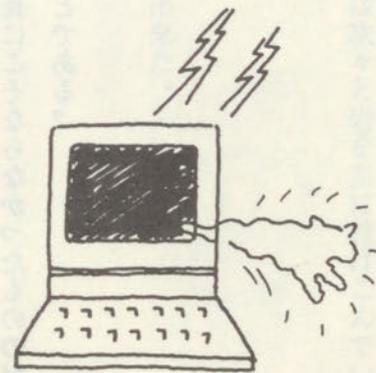
外では雷鳴が鳴り静かに雨が降っていた。その後、雷は村長にこそならなかったものの村のため、人のために働き、そして末長く幸せに暮らしたということである。

『未来の動物園』

静岡県御殿場市

高校教師

小林 美佳



「ただいま!!」

その日もタケシ君は、学校から帰るとすぐにパソコンの前に座りました。

「タケシ、せっかくの土曜日なのよ。パソコンばかりやっていないでたまには外で遊んできなさい。」

お母さんは、タケシ君には子供らしく、外で野球やサッカーをやって泥まみれになって欲しいと思っていました。

「ダメダメ。昨日の続きを早くやりたくって大急ぎで帰ってきたんだもん。それにもうすぐ雨も降ってきそうだし。」

「それならせめて、雨が降る前にタローを散歩に連れて行きなさいね。タローはあなたがちゃんと世話をするって約束で飼ったんですからね。」

けれどタケシ君は、もうすでにパソコンに夢中で、お母さんの声が聞こえないようです。

「はあ。」

お母さんは思わず小さなため息をつきました。

「あゝあ。失敗しちゃった。やっぱり、トライオンとゾウリンの子供をつくるのは無理なのかな。」

タケシ君は今、『未来の動物園』というパソコンゲームに夢中です。このゲームはちがう種類の動物を結婚させて、新しい種類の動物を増やすゲームなのです。例えば、ゾウとキリンを結婚させて「ゾウリン」を作り、トラとライオンを結婚させて「トライオン」を作るのです。それぞれの動物にあった環境や食べ物を考えなければならぬので、なかなかむずかしいのです。「そうか!!ゾウリンはキャベツを食べるし、トライオンは肉を食べるんだから、ゾウリンとトライオンの子にはロールキャベツをあげればいいんだ。」

タケシ君は、時間がたつのも忘れて、キーボードをたたきます。

「タケシ!!雨が降ってきたわ!洗たく物を取り込むの、手伝ってちょうだい!」

ペランダからお母さんが叫びましたが、タケシ君の耳にはまったく入りません。外はもう雷まで鳴り始めていたことさえも知らず、ゲームを続けていました。

『未来の動物園』はもう、不思議な動物でいっぱいになりました。それでもタケシ君はまだ

キーボードをたたき続けます。

「うーん。困ったなあ。おりをもっと増やさなくっちゃ。」
と、その時です。

ガラガラ、ゴロゴロ、ドッシャーン!!

突然大きな雷が鳴り、パソコンの画面が真っ暗になりました。いえ、真っ暗になったのは画面だけではありません。タケシ君の部屋の電気も他の部屋の電気も、全部消えました。

「しまった! 停電だ!!」

停電になり、パソコンの電源が切れてしまうと、今日増やした動物たちはみんな消えて、0になっってしまうのです。

「くそっ!! せっかくいい所までいったのに!」

タケシ君は悔しくてたまらず、近くにあった物をめちゃくちゃに投げつけました。もちろん真っ暗ですから何をどこに投げたかさっぱりわかりませんが……。

すると、何かポコッとにぶい音がして、小さく「痛い」という声が聞こえました。

「やばい!!」

さつき投げた四角い物がお母さんにおつかったのかと思い、タケシ君は首をすくめました。しかし、お母さんにしては何か変です。タケシ君が真っ暗な中、目をこらして見ると何やら青白く光っているものがあります。

「なんだろう。」

おそろおそろその光に近づいてみました。

すると突然、

「痛いじゃないかー!!」

青白い光が叫びました。

「うわあゝ、ト・ト・トライオンだー。」

タケシ君はびっくりして、しりもちをついてしまいました。青白い光は「未来の動物園」のトライオンだったのです。

「ど・どうして……。」

タケシ君は驚きでそれ以上しゃべることができませんでした。

「ぼくらのおりにカギをつけ忘れたでしょう。」

後ろから声がしたので振り向くと、そこにはぼんやり光るゾウリンがいました。パソコンの画面からは次々と「未来の動物たち」が出てきます。動物たちはみんな、電気クラゲのように、ぼんやり光っていました。

「タケシ君はいつも私たちをせまいおりに閉じこめるんだもの。頭にきちゃうわ。」
コアラッコがいました。

「オイラたちは道具じゃないんだ。勝手にいろんなものとくつつけられちゃめいわくだ。」と、

肩のコブをたたくゴリラクダ。

「勝手なことをするタケシ君なんかこらしめてやる。」

タヌキツネがタケシ君の頭をこづき、未来の動物たちはタケシ君をとりかこみました。

「だって……だって……これはゲームなんだ。ホントのことじゃないんだ。」

タケシ君は怖くて泣き出しそうでした。

「ゲームだなんていうけど、人間はそのままの感覚で大人になって、動物たちをあやつろうとするんだ。未来ではそんな風にして死んでいった仲間がたくさんいるぞ！」

アリクイノシシが声をあげ、鼻を振りあげました。

「わーん。ごめんなさい。たすけてー。」

タケシ君は叫びました。するとその時、何か黒いかたまりが部屋に飛び込んできて、アリクイノシシにアタックしました。

「ワンワン!!ワン!!」

タローです!!

「ウワー!!ギャー!!」

未来の動物たちはそのいきおいに驚き、われ先にと、パソコンの中に戻って行きました。

未来の動物たちが全部パソコンに戻った時、部屋のあかりがつかまりました。停電が終わったようです。

「タロー、タロー！」

タケシ君は泣きじゃくりながら、タローを抱きしめました。

「雷が鳴ってるのに、タローを外の小屋につないだままだったでしょ。お母さんが足をふいて入れてあげたのよ。」

未来の動物たちのことなど知らないお母さんが、いつのまにかドアの前に立っていました。

その日からタケシ君は、家に帰るとすぐに、タローを連れて空き地に行くようになりました。泥だらけになって帰ってくるタケシ君を見て、お母さんは、「洗たくが大変だわ。」といいます。が、内心はともうれしそうです。

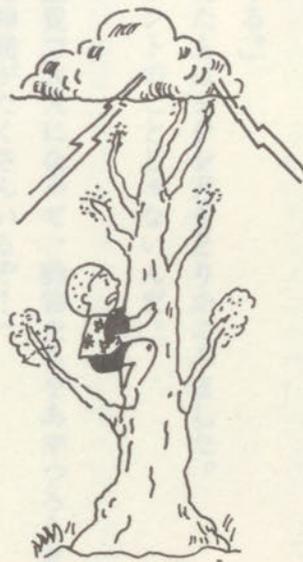


『半ぞうと神さんの木』

千葉県野田市

小学校教員

山口 理



半ぞうは 何をやっても しまいまで できねえ子どもでな。おまけにいつも へまばかり。じゃが だれにでもとりえはあるもんで。まあ、こういうのを とりえっちゅうのかどうかはしらんけど、木登りだけは村一番じゃった。だあれも登れんような高い木でもさるみてえにするのぼっちまうんだ。そりゃあみごとなもんでな。

じゃがな、そんな半ぞうでも どうしても登れねえ木があった。べつに 高くて登れねえわけじゃなくて、登っちゃいけねえ木だったんだ。なにしろ神さんのすんどる木じゃったから・・・。じゃがある時、半ぞうは とうとうこの木に登っちゃまったんだ。

その日、半ぞうは おとっちゃんにたのまれて となり村さ つかいに行った。道のとちゅうに、その神さんの木がある。半ぞうはいつもここを通るたんびに

「なんてまあ たけえ木だ。てっぺんさ登ったら さぞ 気持ちよかろうなあ。んでも、神さんのすんどる木じゃから 登るわけにはいかんのう。ざんねんじゃのう。しかたないのう。」と、でかい声をあげて 通りすぎるんだ。その日もいつもみたいに どなつて通りすぎようと上を見た。

「ん？」

半ぞうは 首をかしげた。てっぺんのほうで たかだか、とんびだか わかんねえが、やけに へんな飛び方をしとる。その飛び方があんまりみょうなんで、半ぞうは 木のまわりを横へいったり、後ろへ回ったり、しばらくそのようすをながめとつた。

「や、またおかしな飛び方をしとる。どうしたんじゃろうか。心配じゃ心配じゃ・・・」

半ぞうは たまらず、つかいのにもつを 近くの草むらにかくした。それから ぶつとい木のみきに手をかけてな、うんしょ うんしょと 登りはじめたんじゃ。

「登ったら ばちがあたるっちゅうけど、おら、このまんまじゃいらんねえ」

半ぞうはぐんぐん登っていった。いや、そのはええことといたら はなのおくが すかつとするほどだ。こんなちようしで登ったらあつというまにてっぺんさ着いちまう。

ところが ふしぎなこともあるもんだ。あんなにはええ半ぞうでも ちつともてっぺんにやとどかねえ。

この木はな、村では「神さんの木」ちゅうとるけど、本当は「くすのき」ちゅう木だそう

な。高いつたつて たかがしれとる。それなのに ちつとも てっぺんに 着かねえんだ。

「こら、なんてたけえ木だ。なかなか登りきんねえ。」

半ぞうは 木のでっぺんを見上げた。すると上のほうには 雲だか かすみだかがかかって よく見えなんじゃった。

「よわったのう。どこまでいってもてっぺんなんぞありやしねえ。やっぱり 神さんのすんどの木うちゅうのは 本当だったんじゃなあ。」

とつぜん、空がまっ暗になってな。ゴロゴロゴロゴロ ねこの のどみてえな音が あつちのほうから 鳴りだした。雨がふつてきた。風も びゅうびゅういいだした。空は もつとまっ黒になった。半ぞうは体中びしょびしょになって 登ったんじゃ。

ピカッ・・・。すんげえ雷じゃった。あたりが昼間みてえに明るくなってな。それから次はバリバリ、ドカーンときたもんだ。半ぞうは耳がぶんざけるかと 思ったくれえだ だがな、それでも半ぞうは登ったんじゃ。

「おらしか 登らんねえ。ほかに あの鳥を助けられるやつはいねえ。おらが 登んかったら・・・」

ところが 半ぞうのうでは すっかりなまっちまって さっぱり力はいんねえ。

「もう登らんねえ」

そう思ったとき、まるで まっほつくりくらしいの ちっちゃいひなどりが 半ぞうの目に

飛びこんできた。

「こりゃ たかのひなどりじゃ。かわいそうになあ。それで親鳥があわてて あんなみょうな飛び方をしとったんじゃなあ。」

ひなどりは ほそい枝に足ひっかけた。さかさまになっておった。半ぞうは ずぶぬれになりながら やさしく手のひらでつつんでやった。すは目の前にあつたんで、かんたんにもどしてやれたんじゃ。

「やれやれ よかったなあ。」

そういつて 半ぞうが あせをぬぐった時のことじゃった。

「あつ、いかん。」

つかれとつたんじゃろう。半ぞうは手をすべらせて、そのままさかさまに 落ちていったんじゃ。

「あーっ、おらは もういかん」

そのとき、もう一回 あのピカッ、バリバリ、ドカーンがきた。

半ぞうは 目の前がまっ白になった・・・。

「ありがとう ありがとう・・・」 頭の中に そんな声がひびいてな。半ぞうは目をさましたんじゃ。

「あ、あれ。おら・・・どこじゃこは・・・」

半ぞうは きよろきよろと あたりを見回した。そのとき、またさっきの声が出た。それは空のうんと上の方から聞こえた。

「ありがとう ありがとう・・・」

空では たかの親鳥が くるくる 回ってとんでおった。

「なんだか あいつがいつとるような気がするのう。まあなんにしても、よかつたなあ。よかつた、よかつた。・・・それにしても おらも よく助かつたもんじゃ。こんな たけえ木からおつこつて・・・ ふしぎじゃなあ。本当にふしぎじゃ。」

半ぞうは 首をちょこつとかしげながら ばんばんと 体についた土をはらった。その半ぞうの動きが びたつと止まった。そして急に じべたにはいつくばって 両の手をしっかり合わせたんじゃ。ありがとうごぜえます、つてな。

半ぞうは そうつと頭をあげた。神さんの木は だまってただ どうんとたっているだけじゃつた。またふかぶかと頭を下げると、そんなとき ちびつと ピッカリ光つて、コロコロ、トンと 遠くで音がした。

半ぞうは ゆっくり立ちあがった。おっと、にもつをわすれちゃなんねえ。あわてて草むらからつかいのにもつを取り出すと、半ぞうは またとなり村への道を歩き出した。そしてもう一度、後ろをふりかえった。

いつの間にか 空はすっきり青空で、ぐうんとそびえた木は、なんだかとってもやさしげじゃつたと・・・。



一般の部

優秀賞

『ペカッとンゴロンゴロ』

兵庫県西宮市

主婦

平田 あけみ



ペカツという名の雷っ子とンゴロンゴロという名の雷っ子の兄弟がいた。兄さんのペカツの方は、雷さんをピカピカ光らせる空の照明係の見習いをしてた。弟のンゴロンゴロの方は、雷さんの太鼓をドカドカ鳴らす空の音楽係の見習いをしてた。まずは真面目にしてた。

いつもなら二人は、大人の雷オニの助手をしている。だけど、今日は大人たちはみんな忙しい。そうだ。「全国雷オニ、ヘソまんじゅうコンテスト」があるからだ。

それで、ペカツとンゴロンゴロは、今夜二人だけで、雷さんをやるように言われてた。山間の小さな村の上で、小さな雷さんをやる仕事だった。

「ここじゃここじゃ、この村で二人だけの初仕事じゃ」

二人は、はりきって雷雲じゅうたんを広げて準備をした。

そのころ村では、年に一ぺんの盆踊りの真つ最中だった。ただ近ごろは、若い連中が町に言っ

てしまつて、昔ほどのにぎわいがないのだった。それでも、雲の上の雷っ子のところにも、盆踊りのちようちんの光や音楽がとどいていた。

「あれまああれま、村じゃ盆踊りしとるよ」

二人は、雷さんをやるまえに、少しだけのぞいてみたくなつた。

「おい、覚えておるか。昔、とっちゃんが、人間の祭りに下りてつて、甘くて甘くて白くてふわふわの雲みたいなのを取つてきてくれたらう。あれは、うまかつたの」

「そうじゃつた。とっちゃんは、人間にこう言つたそうじゃ。ヘソを取るのには許してやるから、そのふわふわしたもんをありつたけよこせつちゅうて。もいつぺん食いたいのう」

「そしたらわしらも同じように言つて、あの甘くて甘くて白くてふわふわの雲みたいなのを取つてこ。雷さんするのは、それからでも遅くねえ」

ペカツとンゴロンゴロは、びゅーつと下に降りてつて、さつそく盆踊りの広場に入り込んだ。二人は、ちようど小学生くらいの背丈で、まだ角も髪の毛に隠れるほど小さかつたもんだから、誰にも雷っ子とは気づかれなかつた。

あつたあつた、綿菓子屋。ペカツとンゴロンゴロは、綿菓子屋の前に行つて、

「おまえのヘソのかわりに、それよこせ」

「ありつたけよこせ」というようなことをわあわあ言つた。ところが、綿菓子屋のおやじさんは、そんなことはおかまいなしに、

「え？ヘソがどうしたって？なんだって？まあいいや。綿菓子はどうかね。ひとつ三百円だよ、あまあいあまあい綿菓子だよ。ほしいかい。坊や、お金を持っているんだろね」

と言うのだった。そう言われてしまつては、ペカツもンゴロンゴロも首を振るしかなかった。

「おっと、お金がないんじや、綿菓子はあげられないよ。おっとうかおつかあにもらつといで。

三百円だよ」二人は、顔を見合わせた。なにせ「お金」というものを見たことがなかった。

仕方なく、「お金」を探すことにした。

そのうちに、村人たちの話が耳に入ってきた。

「今年は人手がたりなかつたせいとか、ちようちんが寂しいなあ」

「今年の太鼓は、威勢が悪くてえ、もつと元気に太鼓を打てるやつは、おらんのか」

「仕方ねえよ。なにせ村には年寄りと子供ばかりだ」

ペカツとンゴロンゴロは、二人してちよつとうなずき合つと、盆踊りのやぐらの上に、するするすると登つていった。それで、ペカツは、景気よくあたり一面をピツカピツカピツカ光らせた。まるで、きれいな花火を見るようだった。ンゴロンゴロの方も、負けじと得意の太鼓を叩いた。ドンガラドンガラドンガラコンコンと、体が勝手に踊りだしそうなるまい太鼓だった。村人たちは、大喜び。家にいた人も、ぞくぞくと集まつてきた。それどころか、近くの町や村からも、ぞんろぞんろぞんろ人がやつてきた。

「ものすげえ祭りだな」

「なんだか楽しそうだね」

「われも仲間に入れてな」

たくさんの人が、踊りの輪に加わつていった。

「こりゃ楽しい、こりゃ愉快」

みんなが、本当におもしろおかしく過ごしたあと、ペカツとンゴロンゴロは、村長さんに呼ばれた。

「坊やたちのおかげで、今年の盆踊りは、実によかつた。こんな大きな盆踊りの輪は、初めてだよ。うん、ありがとうありがとう」

村長さんは、そう言いながら、二人の頭をかわるがわるなでたのだった。

「お礼に、何かごほうびをあげような。何がいいかな」と言った。すると、ペカツとンゴロン

ゴロは、

「わしら、お金つちゆうもんを探していたところだ。だから、お金をもらいてえ。だけど、本当に欲しいのは、あの甘くて甘くて白くてふわふわの雲みたいなんなんだ」と照れくさそうに言った。

村長さんは、うんうんとうなずくと、二人に好きなだけ綿菓子を持たせてくれた。それから、奥さんに言つて、新品の歯ブラシと歯磨きを取つてこさせて、それも渡してやつた。二人は喜びいさんで、ぱあーとかけていってしまった。

ペカッとゴロンゴロがそのあと雷さんをやったかって？それが、綿菓子を食べるのに夢中になって、すっかり忘れてしまったらしい。おかげで村の盆踊りは、一晩中盛り上がりっぱなし。翌朝、奥さんは村長さんに、

「あの子たちに歯磨きの道具まで、持たせてやったのはなんでなの？」とたずねた。すると村長さんは、綿菓子みたいな雲がポカンポカンと浮かんでいる空を見上げながら、こんなふうと言った。「坊やたちの頭に手をやったときにわかったんだが、あの二人は雷の子だったよ。ちいちゃな角が、ちゃんとはえていた。雷オニが、綿菓子を食すすぎて、歯痛でもおこしたら大変だろう？めったやたらに、メリメリバリバリ雷落とされたんじゃないかなあ」

一般の部

佳作

『石の上にも三年』

東京都三鷹市

奥山 宗弘



ある日、地獄のエンマ大王が自分の部屋で日課の昼寝をしていると、門番の赤鬼が起こしに来ました。

「もしもし、大王様。お昼寝のところをお邪魔してすみませんが、門前に変なやつが参りました」

「いつもの通り、断罪室に通しておけ」

「しかし、人間の亡者ではないのでございます」

「人間の亡者ではない？ しかれば、いったいぜんたい何者だ？」

「カミナリです」

「カミナリ？」

「ハイ。しかも、子供でございまして、ゴロ助とかいう名前だそうです。」

「カミナリのゴロ助？親にはぐれて道に迷ったのであろう。追いついてしまえ」

「道に迷ったのではなさそうです。「大王様にお会いしたい。会わせてくれなければ、此所でバクハツしてやる」と申しまして、ビクとも動きません」

「気の強い小僧だな。しかし、カミナリに爆発されては大変だ。役所がメチャクチャに壊されてしまう。よろしい、会おう。応接室に通しなさい」

「応接室でございますか？ 相手は子供でございますよ」

「地獄の大王であるこのワシに、自分の方から面会に来るとは、子供ながらも大胆不敵なやつだ。粗末な待遇は出来ん」

大王が応接室に入っていくと、子供のカミナリが直立不動の姿勢で突っ立っています。

「お前がカミナリのゴロ助か？ ワシがエンマ大王である。何の用で参ったのか？」

「大王様の下で、掃除夫にでも使っていたのだかと思つて参りました」

「地獄で働きたいと申すのか？ おかしな小僧だな。カミナリの仕事が嫌いなのか？」

「カミナリの仕事は大好きです。しかし、ボクは高所恐怖症なのです」

「コーシヨキヨーフシヨ？」

「ハイ。一種の病気だそうです。高い所に登ると、メマイがして、足がすくんでしまうのです。

ボクは高い所がニガテなのです。カミナリは大空を飛び回つて、あっちこっちに雨を降らせるのが仕事です。高所恐怖症では、オトナになつても、一人前のカミナリとして生きて行くこと

が出来ません」

「なるほど。カミナリが高所恐怖症では困るであろう。可哀そうなやつだ」

「使つて下さいますか？」

「イヤ。そういうわけには参らん」

「何故ですか？」

「お前はカミナリだ。鬼ではない。地獄の従業員は鬼ということに決まつてるんだ」

「鬼だつてカミナリだつて、違いはないと思ひますがね」

「違いはないだつて？」

「ハイ。鬼もカミナリも、年中虎の皮のフンドシ一つで暮らしております。鬼とカミナリは親類だと思ひます」

「なるほど。そう言えばそうだな」

「此所で断られたら、ボクは働き口がありません。野たれ死にするしかありません。大王様はボクを殺すおつもりですか？ 大王様、お願いです、ボクを採用して下さい」

「よろしい。ワシの所で使つてやろう。しかし、おまえは鬼ではないのだから、役所の中に住まわせるわけにはいかない。そうだ、山の上の時報係に採用してやろう。」

ゴロ助は、大王のお情けで、地獄の時報係に採用されることになりました。二時間ごとに半鐘をたたいて、みんなに時刻を知らせる大切な仕事です。地獄の鬼たちの仕事は二時間交代な

のです。

半鐘は、役所から離れた山の上であり、しかも高いヤグラの上にあるのです。狭くて手すりもない垂直な梯子を、何十段も登らなければなりません。

高所恐怖症のゴロ助にとって、地獄のような毎日が始まりました（地獄にいるのですから、アタリマエノハナシですがね）。

ゴロ助は、

「この仕事が出来なかったら、ホームレスになって餓死する以外に道はない」と思い、

「高いと言ったって、空よりは低いんだから頑張ろう」

と決心し、雨の日も風の日もヤグラに登り、時報係として、毎日まじめに働きました。

三年の月日がたちました。

この三年間、毎日二時間に一度ずつヤグラに登っている間に、ゴロ助は、ニガテな梯子登りがニガテでなくなりました。慣れてしまったのです。そして、いつの間にか、高い所が怖くなくなり、楽しそうに口笛などを吹きながら登るようになりました。

ある日のことです。ゴロ助は大王に呼ばれました。

「ゴロ助、鬼どもの報告によれば、毎日楽しそうに働いているそうだな」

「ハイ。おかげさまで、楽しく過ごしております」

「高い所がニガテでなくなったのかな？」

「ハイ。大王のお情けによりまして、どんな高い所でも、全然怖くなくなりました」

「それは結構なことだ。『石の上にも三年』というコトワザがあるが、ゴロ助の場合は、『ヤグラの上にも三年』、ということだな。ところで、いつまで地獄にいるつもりだ？」

「本当は、一日も早く空に帰りたいと思っております。カミナリの世界も人手不足で、あっちこっちで雨不足による水不足が発生し、人間たちが困っているそうです。一日も早く帰りたいと思っております。しかし、高所恐怖症を直していただいた御恩があります。その御恩返しに、ボクは一生此所で働かせていただくと思っております」

「それは感心な心掛けである。しかし、カミナリの働き場所は、なんと言っても空だ。ゴロ助よ、空に帰りなさい。恩返しなどを考える必要はない。空に帰って、時々ワシらのことを思い出してくれば、それで充分だ」。

ゴロ助は、空に帰ることになりました。

いよいよお別れの時、門番の赤鬼も、大王も、目にウッスラと涙を浮かべて送ってくれました。『鬼の目にも涙』というコトワザがありますが、大王の場合は、『エンマの目にも涙』、というわけです。

空に帰ったゴロ助は、今では、一人前の立派なカミナリとなり、世界中の空を飛び回って活躍しております。

ゴロ助とエンマ大王は、「年賀状」と「暑中見舞い」の交換を、今でも続けているそうです。門番の赤鬼は年をとり、役目を息子に譲り、孫のお守りをしながら、幸せに年金暮らしをしているそうです。

(終わり)

一般の部

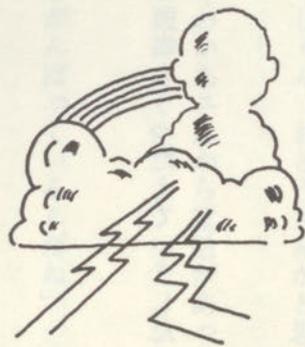
佳作

『お父さんは虹男』

埼玉県草加市

小学校教頭

福野 武



夏休み。ここは宇都宮市内にある小学校。

お盆の前日のことですが、音楽クラブの練習が終わって一人で教室に戻ってきた5年生のいづみさん。外は大雨。窓に雨粒が激しく当たり、雷が光りました。

「お母さん、傘もってきてくれるかなあ・・・」

今日のお母さんは、仕事はお休みのはず。迎えに来てくれるかもしれません。

「ドン・ゴロゴロ。雷雲が学校の真上にきているようです。くらやみの中で雷鳴が盛んにくりかえされています。」

いづみさんにとって雷はこわいけど、雷には楽しい思い出もつまっています。それは、おもに今はいないお父さんのことです。

・・・一昨年、男体山に登った時もそうでした。山頂まであと三十分というところで急に空

が黒雲におおわれて、

「だめだ、引き返そう。このままじゃみんな、ずぶぬれになる」

お父さんの判断ができました。

その時、お母さんが、

「やっぱりねえ、お父さんと来るといつもこうなんだから」

手をにぎりながら笑いました。

・・・三年前のことも似ています。おとうさんが小学校の教頭先生になった年の秋。運動会の次の日の休日のことでした。

湯の湖で、紅葉を見ながらボートで鱒釣りをしていると、そこでまた、いきなりの雷でした。とっさに逃げかくれもできず、びしょぬれになり、

「やっぱり私は雷男なんだね」

その笑った顔のしわに、髪の毛がくっついていました。

「さばくの国にでも生まれていればきつと神様になれたな」

思えば、お父さんはそのころから急に白髪がふえ、しばしば頭痛をうったえていました。

「いづみさん」

教室の入り口で声がしました。



いづみさんは、ふいをつかれておどろきました。ほんのいっしゅん、おとうさんかと思ったのです。

「急な雨だね。でも、しんばいはいらぬ。じきに止むし、今おかあさんから電話があつて、すぐに迎えにくるからつて・・・」

ここの学校の教頭先生でした。

「それにしてもいづみさんはえらいね。一人でクラブの練習をがんばっているんだね」

窓を見ながら少し離れて椅子をひきました。

この教頭先生はお父さんと同じ学校にいたことがあり、時々なにかと声をかけてくれます。お父さんの部下としてはたらいていたことがよい思い出になっているらしいのです。いつもはいそがしそうにしている先生ですが、さすがにお盆の前の日で、急用もないらしいようすでした。

「あした、お墓まいりにいくんだつてね。さつきお母さんから聞いたよ」

教頭先生は、お母さんとも親しく、同じ大学を卒業しています。

「少し、お父さんの話をしてもいいかい」

雷鳴が、ちよつと弱まりました。

「はい・・・」

いづみさんは少々かしくまつて聞きました。

「この雨で、十年も昔のサッカーのことを思い出してしまった」

お父さんが教員サッカーチームのキャプテンをしていたころのことらしいのです。

「県立競技場での決勝戦のこと。その日もひどい雷雨だったな・・・」

教頭先生の眼鏡が光りました。

「お父さんがバックで私がキーパーだった。もう少しで終了という時、なんでもないバックパスを私が足をすべらせて取りそこなった。運の悪いことにそのボールを敵にうばわれて同点になってしまった・・・」

教頭先生はなつかしそうに語ります。

「仲間が、がっくりしてほうぜんとしていると、お父さんが「まだ時間がある、気をとりもどせ」と、みんなにカツをいれてくれた。・・・結局、そのことで立ち直って、今度はぐうぜんにも、向こうのチームのミスを誘った。そのことがあって優勝することができた。まさに君のお父さんが優勝を導いてくれた・・・。苦しい時にそばにいてくれると、たよりになる、すばらしい先輩だったんだ・・・」

教頭先生は、それからまた別の話をし、教頭先生自身が、幼い時に父親をなくしたことや、その時の悲しみなどを静かに語りました。

それは、十分に、いづみさんの心と重なっていました。いづみさんの心の底にあるさびしさに手を差し延べようとする話でもありました。なぜなら、いづみさんのお父さんも、この春に

帰らぬ人となっていたからです。

雨上がり。校庭の向こうが輝いていました。

「いづみさん、虹が出ている。虹がこっちを向いて笑っているよ」

教頭先生が立ち上がりました。

校庭の隅にいる人も傘をたたんで見上げていました。

そう言えばいづみさんのお父さんは、虹が大好きでした。去年の光徳牧場で、家族一緒に虹を見た時に、

「わたしは雷男でもあり、虹男でもある」

いばって、笑っていましたっけ・・・。

「だって、雷と虹は親戚でしょう」

お母さんも笑って賛同したものです。「そう、いづみさんのお父さんは雷のようにこわい人だったけれど、雨上がりの虹のように輝いている人だった」

教頭先生は窓から半身を乗り出して、眼鏡をずりあげてつぶやきました。

「・・・」

いづみさんは、うれしかったようです。

ひさしぶりに胸のつかえがとれたような気がしたのでしょう。だれもが避けていたお父さんの話題に、教頭先生が触れてくれたことが・・・。しかもこの虹です。

「・・・お父さんが笑っている」

そう思えたのでしょうか。

苦しい時にいてくれるとたよりになる人だったあのお父さんが、目の前の空にいる。そのお父さんが七色に輝いている。

身近にいないことがどれほど寂しいかは言うまでもありません。

しかし、今、そのお父さんと会っている。これからもまた会える、そう思えるのです。

「・・・ありがとう雷雲さん。そして虹になったお父さん」

お母さんが、正門の先に迎えに来ていました。教頭先生が外まで見送ってくれました。

(おわり)

一般の部

佳作

『まんじゅう屋さんとおへそ』

愛媛県川之江市

主婦

木村 真理



ひかり峠に「かみなり屋」という、まんじゅう屋さんがありました。このあたりは昔から、よくかみなりがなるところだから、この名前がついたのです。その店では、おばあさんがひとり、まんじゅうを作って売っていました。そのまんじゅうは、おへその形をしていて、食べる口の中に、ふわあっとほどよいあまさが広がって、だれでもやさしい気持ちになれるという不思議なまんじゅうなのです。おばあさんは、このまんじゅうを毎日決めた数だけ作りまいた。朝からどんなに売れても追加して作ることはありませんでした。以前は常連さんもたくさんいましたし、店の前を通りかかった人は必ず車をとめて、まんじゅうを買いにきていましたので、午前中のうちに「本日売り切れしました。ありがとうございました。かみなり屋」の看板がかかる日も多かったのです。ところが、近くに高速道路が開通してからというものの、店の前を通る車の数がへり、夜になってもまんじゅうが売れ残っている日が多くなりました。それで

もおばあさんは、毎日きてくれる常連さんといっしょに、お茶をのみ、まんじゅうを食べながら世間話をするのを楽しみにしていました。

ある日の夕方のことです。

ピカッ・・・ドン、ゴロゴロゴロ・・・
ピカッ・・・ドン、ゴロゴロゴロ・・・
その日は、いつになくはげしいかみなりになりました。

「きょうは、かみなりさんのきげんがわるいようじゃから、早く店をしめるとするかな。」
窓から空のようすを見ていたおばあさんは、そいいいながら、店ののれんをとりこみはじめました。その日も、まんじゅうは、作った半分も売れませんでした。

あくる朝、おばあさんが店ののれんをかけようと外へ出ると、店の前に男の子がしゃがみこんでいました。

「ほうや、いったいどうしたんだね。」

おばあさんが心配してたずねると、男の子は少しもじもじしながらいきました。

「あのう、このあたりに、本物のおへそよりおいしいへそまんじゅうがあると聞いたんだけど、このお店で売っていますか。」

「まあ、たしかにうちでは、おへその形のまんじゅうを売っているけれど、おいしいといつてくれているんだねえ、うれしいねえ。」

「うん、食べた人はみんな、いってるよ。」

「さあ、かわいいお客さん、中へおはいり。いっしょにおまんじゅうを食べようね。」
けれども、その男の子は、まだ戸口のところで、もじもじしています。そして、ポケットの中から小さい物をとり出していいました。

「あのう、ほく、お金もっていないんだけどこれで、へそまんじゅうもらえますか。」
男の子の手のひらには、ころころとまるい、へその形をした物がありました。

「これ、ほうやが作ったのかい。よくできているねえ、まるで人間のおへそつくりだよ。店にかざらせてもらうよ。ちょうどいい宣伝になるかもしれないね。」おばあさんは、にこにこしながら、それにかわいいリボンのひもをくつつけて、外から見えるように窓のところにぶら下げました。

おばあさんのまんじゅうを食べた男の子は、

「とってもおいしい。」と、大喜びでした。

「さあ、これはおみあげだよ。」

おばあさんは、男の子が帰るときに、まんじゅう一箱をもたせてやりました。

次の日も、また次の日も、男の子は、へその形をした物をひとつずつ持ってきては、おばあさんとまんじゅうを食べながら話をして帰っていくのです。そして、いつのまにか、すっかり常連さんになっていました。でも、その男の子は、おばあさんがいくら聞いても名前も、どこ

の子かもいってくれなひのです。

そのうちに、赤青黄といろんな色のリボンのついたおへその飾りでいっぱいになった「かみなり屋」は、お花畑みたいになりました。

そんなある日のことです。店の前を通りすぎようとしていた一台の車が、とつぜんとまりました。その車の中から出てきた青年は、店の窓にぶらさがっている物を見ていたのですが、すぐに店の中かけ込んできました。

「あのう、すみませんが窓にかかっているおへそをひとつ、ほくにいただけませんか。」

おばあさんは、こうふんしたようすの青年に少しおどろいていました。

「この前のひどいかみなりの日、うたた寝をして気がついたら、かみなりさんにおへそをとられちゃって。もう、はずかしくて、人に見られないかとこまっていたんです。」

そういって、シャツをまくり上げた青年にはおへそがありませんでした。

「ありや、まあ、なんと。」

おばあさんは、とてもおどろきました。

青年は、窓にかかっているおへそをひとつずつとは、自分のおへそがあるべきくぼみに入れて合わせていきました。そして……

「あったあ。このさわりごちといい、ほくにびつたりのがありましたよ。これで、やっと安心です。おばあちゃん、ありがとう。」

そういうと、青年は、お札にまんじゅうを二箱買って帰っていきました。

ところが、次の日から、青年と同じようにおへそをとられた人たちが、あとからあとから「かみなり屋」にきては、おへそを見つけて喜んで帰って行くのでした。

やがて、おへその飾りは全部なくなりました。けれども、おへその話とまんじゅうのおいしさは、このあたりでも評判になり、店はお客さんでぎあうようになりました。常連さんもたくさんできました。けれども、おばあさんは、あの男の子がこのごろこなくなったのでさびしくてたまりませんでした。

何日もたったある日、手紙が届きました。

「おばあちゃん、おげんきですか。ほくです。おやじがとって集めた人間のおへそ入れがからっぽになっているのをおやじに見つかって、カンカンにおこられて、地上に遊びに行かせてもらえなかったんです。でも、おばあちゃんのおへそまんじゅうを食べるとおやじったら、やさしくなっちゃった。こんど、おやじといっしょに遊びに行くからね。おみあげ楽しみにしててね。」

かみなりゴロ太より

「やっぱり、あの子は……。それにしても、かみなりさんのおみあげってなんでしょ。楽しみだわねえ。」

おばあさんは、にこにこしながら、手紙をなんともなんとも読みました。

そのころ、かみなりおやじはどうしてたかというと、へそまんじゅうをほおぼって、満足そうでした。

そして、それからというものの、このあたりでは、かみなりさんにおへそをとられることも大きな被害をうけることもなくなり、時々、かみなりのやさしい音が奏でられたそうです。

（以下、文章が非常に淡く、ほとんど不可読な状態です。これは複製時の文字の濃さや解像度の問題によるものと見られます。）

一般の部

佳作

『三太とゴロ太』

栃木県鹿沼市

農業

大橋 光子



（早く、カミナリさまがこねえかなあ）

三太はかすかに聞こえるたいこの音がうれしくてしかたがない。三太は四つつだ。

三太はカミナリが大きい。カミナリのなる日、うしろの杉の木の下で生まれた。

ひまさえあればたいこばかりたいている。カミナリがなりだすと、はだしになって雨の中にとびだしていく。

三太が朝から青空を見あげて、そわそわしていると、おとなたちは、

「今日も、カミナリさまがくるのけ？」

と聞く。

「うん、くるくる。昼ごろにはくるよ」

すると、昼ごろゴロゴロ、ピカピカはじまるのだ。

いっぽう、雲の上のカミナリさまの家でもちよっとこまっていた。

朝から子どもたちはたいこたきでいそがしかった。たいこをたたくのは子どものやくめだ。ところが、ゴロ太はめそめそ、しくしく。カミナリが大きい。

「こわいよ、こわいよ・・・」

たいこをほうりなげてふるえているばかり。

ゴロ太の母ちゃんは首をかしげて言った。

「父さん、ゴロ太はへんですよ。いつになってもツノがはえてこないし、あんなにこわがって・・・」

「うむ。おれも気になっていた」

ふたりは雲のすきまから地上を見おろした。どしゃぶりの雨の中、イナズマの光が走っている。

いきなり、男の子が家の中からとびだしてきた。

三太だ。

「こらあー、まて！三太」

三太の母ちゃんがおいかけてきて、三太をつかまえた。

「こんなにかミナリがなるとき、外へ出ちゃだめだってば！へソとられるぞー」

「やだ、やだ。おら、かまわねえ。へソなんかいらねー、とるならとれ！くれてやらあー」



そういうと三太は雨の中、土の上になころんでへソを出した。

「おおっ、みごとなへソだ！」

ゴロ太の父ちゃんは雲の上で目を見はった。そのうち、その目はとびだしそうになった。

「ツノだ!!」

「ええっ、ツノ？」

イナズマの光に、てらしだされた三太の頭にちょこんとふたつのツノが見えたのだ。

(もしや・・・) ゴロ太の父ちゃんはゴロ太が生まれた日のことを思いだした。

ゴロ太は生まれるとすぐ、雲のすきまから地上におっこちてしまった。

ゴロ太の父ちゃんはあわてて、杉の木にかミナリをおとして、地上におりていった。

すると、人間の女がたおれていた。そばには男の赤んぼうがふたり。

(どっちがわしの子かな?)

とまよったが、まるまる太って元気がないいた赤んぼうをかかえて、雲の上にもどってきたのだった。

「あいつがゴロ太だったんだ・・・」

「じゃ、ここにいるゴロ太は人間の子？」

「こい！ゴロ太」

ゴロ太と父ちゃんは雲の上からとびおりた。

ピカーッ！ドドドカーン！！

カミナリがまた三太の家のうしろの杉の木におっこちた。家のものはみんなひっくりかえって、気を失った。

ところが三太だけは目をクリクリさせて、つつ立っている。

「あつ、カミナリさまだ」

うれしそうにさげんだ。カミナリさまは三太にたずねた。

「おまえは、カミナリがすきか？」

「うん。すきだ！」

「そうか」

カミナリさまは、三太とゴロ太をならべて、まず、三太に言った。

「わしはおまえの父ちゃんだ。おまえはカミナリの子、ゴロ太だ」

今度はゴロ太に言った。

「おまえはこの家の子だ。人間の子、三太だ」

ふたりは顔を見あわせた。

「うそだー」

「うそじゃない。おまえたちが生まれたとき、わしがとりかえてしまった。ゆるせ」

「わあーい。おいらカミナリの子だーい」

三太は大よろこび。

「ああ、よかった。もうたいこたたきしないでいいんだ」
とゴロ太はほっとした。

カミナリさまは、口からピッピッと光をだして、ふたりの頭にあてた。

「今からゴロ太は三太。三太はゴロ太」
と何回もくりかえした。

そのようにしてふたりは入れかわった。

「三太、おまえにゴロ太のへそをやる。いつか役に立つことがあるだろう」

そう言って、カミナリさまはゴロ太と三太のへそをとりかえてしまった。「さあ、いくぞー！」
いきなりあたりがまっ暗になり、イナズマがあちこちで光りだした。

ピカーッ！ドドドカーン！！

杉の木にまたカミナリがおっこちた。

カミナリがおさまると、家のものは大さわぎ。三太がいない。さがしまわると、杉の木のそばでおれていた。

「うーんうん・・・」

「あつ、気がついたか、三太。わかるか？」

「母ちゃんか？」

「おかしなこと言って・・・おめえ、カミナリさまにヘソとられたんだんべ」と母ちゃんがわらった。

三太はそつとヘソを見た。

すると・・・ヘソが・・・でっかいヘソがピクピク動いている。三太はあわててヘソをおさえた。

それからというものの、三太はカミナリがなくてもよろこばなくなった。イナズマの中、外へとびだすこともなくなった。

みんなは、カミナリさまにヘソをとられたからだと言っている。

雲の上では、ゴロ太が力いっぱいいたいこをたたいていた。ツノもだいぶのびて、カミナリの子らしくなった。

あのヘソは・・・とても役に立っている。

雨がふらないでこまっていると三太のヘソがかゆくなるのだ。三太がほりほりヘソをかくと、雨はかならずふってきた。

みんな大よろこびだ。

めでたし、めでたし。

一般の部

佳作

『米を盗んだ雷様』

福島県二本松市

自営業

菊田 智



その朝も石のように重い腰を上げて、辰吉は小屋から炭窯に向かった。火入れをして三日目、通風口から窯の内側を覗くと、原木の樽の木は順調な焼き上がりを見せていた。

辰吉は窯の前に腰をおろし、まずは一服と、煙管を取り出す。深く吸いこんだ煙をはき出しながらも、思いはやっぱり次男、平次の面影を追っていた。平次戦死の報を受けたのは七日前、ビルマ戦線での死であった。

なにせ”名誉の戦死”である。人前でメソメソするわけにはいかない。一方”増産”のかけ声は彼を休ませなかった。指示された期日までに、割り当てられた俵数をきっちり納めなければならぬのだ。

「平次、へ・い・じー」

辰吉は、心の中で繰り返し息子の名を呼んでいた。こうした思いにふけると、必ず重なり合

うように長男、平市の姿が浮かび出る。

「平市死ぬなよ、お前は生きて帰ってこい」

今度は平市に声をかける辰吉だった。と、その時、辰吉はかすかにサイレンの音を聞き取っていた。F山地西端の盆地にあるk市からのものだろう。

「また、空襲警報だな」

つぶやきながら、つい頭上の空に目をやる。するといきなり、キーンと空気を引き裂く鋭い音が響いてきた。米軍の艦載機・グラマン戦闘機だ。五機編隊のグラマンは、すぐこの炭窯の上空にさしかかる。窯からの白煙は目につきやすいから危険だ。辰吉は跳ぶようにして谷間の岩陰に身をひそめた。だが編隊はk市のある西空に点々と消えていった。

「こんなに頻繁に米軍機が本土を襲うとはなあー辰吉の胸をいつもの不安がよぎる。」

窯場にもどった彼は、念入りに窯の中を覗きこんだ。そして二度三度うなずきながら、

「よし、明日には焼き上がんべ」

とひとりごちていた。辰吉の次の仕事は夕飯の支度だ。炭は一窯焼き上がるのに四日はかかる。その間小屋に寝泊まりして、窯の様子を油断なく見張らなければならない。

窯場から米を取りに小屋に向かう辰吉は、ふと足を止めた。ポツリと雨粒がほつべたに落ちてきたのだ。いつの間にか、空は黒い雲に覆われていた。

これは一雨くるぞ、と足早になった彼の足が、何歩も進まず、またはたと止まった。飛行機

が一機目についたのだ。しかもそれは尾部から火煙りを吐いていないか。

「さっきのグラマンの片割れだな」

とつさに辰吉はそう思った。k市で対空射撃を受けたのだ。墜落するのかな、彼の目は、F山地の空を太平洋に向けて消え去ろうとする機影に、釘づけになっていた。

はっとわれに返った時、周りの雨足は一気に早まって木の葉をたたき、おまけにゴロゴロと雷まで鳴り出していた。

にわか雨だろう、夕飯は雨が止んでからと、辰吉はしばらく小屋で待機することにした。ところが、予想に反して雨足は強くなる一方。ついにどしゃ降りの大雨となってしまった。稲妻が飛び交い、雷鳴が荒々しく駆け巡る。

こいつは当てはずれだ、などとぼやいているうちに、彼の小屋は夕闇に閉ざされ始めた。

粗末なトタン屋根からは雨が漏れ、入口のゴザは風にあおられて、水しぶきが吹きこむ。

「これは夕飯どころじゃねえぞ。一杯ひっかけて寝るしかねえか」

ランプをつけ、ヤミで手に入れた焼酎をグイッと飲みほす。さあ横になるぞ、こうして辰吉はせんべい布団にもぐろうとした。と、その時、強烈な雷光が辺りを突っ走り、耳をつんざく雷鳴が地を震わせた。

「す、すごい雷だ。すぐその辺に落ちたな」

彼は耳を押さえて、布団を深々と被った。しかしすぐに起き上がった。ランプの消し忘れだ。

ランプの芯を巻き終え、真暗な中また布団にもぐろうとした。丁度その時を待っていたかのようになり、また激しい一閃、ピカピカッー電光が転がり回った。この全くわずかな一瞬、彼は見てしまったのだ、めくれたゴザの、入口の土間にうずくまるものを――

目をむく辰吉の喉から、人間のものとは思えぬ悲鳴があがった。土間の物体がすうつと立ち上がったのだ。そこへ鋭い閃光がまた一つ。今度こそ彼は、その物の形態をまざまざと見せつけられていた。

「お、お、大入道だ。鬼だ。雷だあ」

わけのわからぬことを口走る辰吉――この辰吉が完全に気を失ったのは、目前の怪物が、大口をあけて何やらわめきちらし、目玉から赤い光を出して、彼を睨んだ時だった。

次の朝、小鳥の囀で辰吉は気を取り戻した。からりと晴れた朝だ。だが、彼の頭は昨夜の怪物のことでいっぱいだった。

「あの怪物は一体何だ。雷？そんなばかな」

こうして辰吉は、何度首を横に振ったことか。小屋の外に出て見ても、別に変わったことはない。たとえ怪物の足跡などがあつたにせよ、あの大雨が消してしまったに違いない。――あれはやっぱり夢だったのだ。お前は平次のことと疲れきってるんだよ――辰吉は何度も何度も自分にいい聞かせていた。

こうして自分の気持ちを引き立てながら、朝飯の準備を、と小屋に戻った辰吉だったが、土

間で、またギグツと立ちすくんだ。いつもそこに置く棚の上の米が、袋ごとなくなっている。目をこすつて確かめたが、やはりない。

「雷様が、あの米を盗っていったとでもいうのかい――そ、そんなばかな」

とはいっても、あの怪物と姿を消した米――辰吉の胸を去来するのは、やっぱり雷しかなかった。そわそわと落ち着けない彼を、さらにギョツとさせたものがあつた。小屋の前にドカドカと人間の足音がしたのだ。外を見ると、顔見知りの村人達で、中には駐在巡査もいた。しかもめいめい斧や猟銃で武装しているではないか。目を丸くする辰吉に巡査がいった。

「昨日、グラマンを一機やつけたら、アメリカ兵が一人、この山地に落下傘で降りたんだ。お前そいつを見なかったか」

辰吉の全身がギユツと強く締めつけられた。――もしかしてあの雷こそ米兵では――だが、辰吉の口から出た言葉は、こうだった。

「いいや、だれにも合わなかったぞイ」

この日を境に、人々はその米兵の安否を知りたがったが、死体はもろろん、捕えたという話も全くないまま、終戦を迎えた。

――米兵に手をかけた俺は、国賊だった――

自分を責める辰吉だったが、平市が無事復員した時、あの米兵の親の喜びを感じ取った。

平市は辰吉の話を聞いて、こういって。

その日は、いいお天気だったのに、急に風が吹いて、灰色の雲が公園の上によって来ました。こういう時は通り雨がやって来るのでおじいさんは、雨宿りのできる木陰に自転車を寄せました。ピカッと稲光がして、ガリガリッと音がしたとおもうと、ザッと雨が通って行きました。そして雨の上がった公園にはひとつこ一人いなくなってしまうました。これではきょうはソフトクリームを売るのは無理でしょう。おじいさんは、やれやれとひとつ伸びをしました。と、いつのまにか目の前に、男の子が一人立っています。いえ、男の子と思ったのですが……。その子の髪の毛はクルクルと茶色で、耳には金色の輪がついて、虎の皮模様のパンツをはいているではありませんか。おじいさんはピンとききました。昔から言い伝えられてきた雷の子どもに違いありません。

その子は、おじいさんの方に手を差し出してなにか言いました。

「パロピロ、ピピリ」

「えっ？なにになに」

おじいさんはその子の方に身をかめました。その子は、空を指さしたり、何かを食べるまねをしたり、身振り手振りで、パピピプと懸命にしゃべります。おじいさんは、だんだんその子の言うことがわかってきました。

「よしよし、つまりこうだな。きみは雲の上から、人間の子どもたちがソフトクリームを食べるのをいつも見ていた。ずっと食べてみたいと思っていた。そうだな？」

その子はうれしそうに、こくりとうなずきました。そこでおじいさんはすぐに自慢のソフトクリームをあげても良かったのですが、つい、こう言ってしまいました。

「ただであげるわけにはいかないだよ」

その子は、ちよつと困った顔を見ると、ふつと消えてしまいました。おじいさんのあわてたことと言ったらありません。

「ああ、わしはなんてことを言ったんだ。最初からあげるつもりなんだ。ただもうちよつと話していたかっただけなんだ」

するともう、おじいさんの前にその子が立っているではありませんか。こんどは手に、お尻を葉っぱでくるんだソフトクリームのようなものを持って、しきりにそれとおじいさんの自転車の荷台を交互に指さしています。

「パツ、ピツ、プバリ」

おじいさんはどんなにほつとしたことか。

「分った、分った。きみのとわしのとを交換しようと言うんだな。喜んで。」

おじいさんは大急ぎで、レバーをおして、コーンカップに一巻きおまけの「舂斗雲」のしっぽをつけて、その子に渡しました。ひとなめすることの、その子のうれしそう、おいしそう、顔と言ったら。

おじいさんは、やっと本当に安心して、自分もその子にもらったソフトクリームを食べまし

た。特に味はないのですが、冷たくて、口に入ったとたんフワツと消えて行くような感じですが、食べ終るとなんだか心が軽くなったように思えて、おじいさんは聞きました。

「もしや、これは本物の雲のしっぽかい？」

その子はまた、こくりとうなずきました。

そして、またなにか懸命に訴え始めました。トントントンと横に次々跳んでみせたり、大きく手を広げたりして、のぞくようにおじいさんの顔を見上げます。

「トウ、トウ、トウ、トウ、テツツリ、パロピロ、ピピリ」

おじいさんは、うんうんと大きくうなずきながら、その子の話を聞いていました。

「きみには、きょうだいがたくさんいて、みんなソフトクリームが食べたくなって言うんだね。

いいよ、いいよ。きょうはどうせもう、お客さんはいないんだ。きみのきょうだいみんなにごちそうしよう。」

その子の顔は、ぱっと花が開いたようでした。

とたんに、その子の後には、手に手に雲のしっぽのソフトクリームを持った雷の子どもが20人ほど目を輝かして並んでいたのです。もう、おじいさんの忙しいことと言ったらありません。機械みたいに手も目もぐるぐる動かして、その子のきょうだいみんなに、一巻きおまけのソフトクリームをつくり上げました。その日のために用意していた材料はスツカラカンになりました。

うれしそうに、おいしそうに目をくりくりさせた顔、顔、顔を、おじいさんは満足して見渡しました。

さて、おじいさんは腕をぐるりと背中から回してくると大きくうーんと伸びをしました。こんどは、おじいさんが雲のしっぽソフトクリームをいただく番です。

そうです。ひそかにおじいさんが感ずいていたとおりです。雲のしっぽソフトクリームを食べるとフワツとからだが軽くなるのです。3個目を食べた時、靴が少し地面から浮きました。全部食べ終えたおじいさんは、雷の子どもと一緒に公園をひとめぐりすることになりました。噴水は真上から見ると、水の輪が傘を広げたようでした。水蓮の花が、黄色いマリを浮かべたように見えます。楠の葉っぱは一枚一枚がお日様に向って手を広げています。いつも自転車で往復している公園を、真上から眺めたおじいさんは、からだの中を風が流れるように気持ち良くなりました。そして、そこで雲のしっぽたちの効き目が切れたのでしよう。おじいさんの靴はいつもの重さになって、自転車の横に戻っていました。もう雷の子どもは一人もいません。灰色の雲もずーっとむこうに行ってしまうています。

おじいさんはゆっくり自転車のペダルを踏んで帰ります。ソフトクリームの材料はスツカラカンですが、きょうの売り上げはありません。でもおじいさんの胸の中はほくほくと暖かいのです。

どこかで、雨上がりの公園にやって来る子どもの声がしています。

創作童話 審査員

いわむら かずお 絵本作家

黒川 常幸 童話作家

志賀 かう子 エッセイスト

森 絹枝 随筆家

福田 三男 下野新聞
学芸部長

創作童話 実行委員会

委員長 青木直樹 青源味噌(株)
宇都宮雷都物語副本部長

委員 斎藤明久 三和酪農業協

委員 鈴木郁夫 (有)新三

委員 鈴木孝助 (株)カネサン

委員 和気幸雄 (有)高林堂

宇都宮雷都物語
事業本部部長

小林 丘 (株)小林三郎商店

宇都宮雷都物語
事業本部副本部長

斎藤 公則 (株)マスクン

宇都宮雷都物語 創作童話 協賛企業

(株)マスクン、(株)こめよし、栃木県経済農業協同組合、青源味噌(株)、(有)スブランドールとらや、
栃木県三和酪農業協同組合、丸彦製菓(株)、(株)升善、(株)ミットヨフーズ、(株)雅洞、

(株)小林三郎商店、(有)新三、マルウ製菓(株)、(有)あづま屋、日光ゆば製造(株)、毛利食品(株)、
(株)今井本店、イトランド(株)、栃木秋本食品(株)、フタバ食品(株)、上野商事(株)、伴印刷(株)、

(株)オニックスジャパン、(株)加藤鐵工所、(株)荒川製作所、日光種苗(株)、(株)足利銀行本店営業部、
泰和工業(株)、(有)横山起電、(株)宮本印刷、東光建設(株)、(株)ロココ、須賀工業(株)、米山商店、

関東商事(株)、(株)ビクトリア、秋田包装(株)、エイジ印刷、(株)メイワパックス、ザ・パックス(株)、
ベルヴィ宇都宮(株)、(株)シー・エス・テイ、(株)中村味噌店、ヤマゼン印刷(株)、浄鏡寺、

(株)國華ギヤラリーシエール、第一測工(株)、(有)原昇、南海油化(株)、平成ネットワーク(株)、
前田工業(株)、ミユキ建設(株)、トヨタカラー栃木(株)、(株)折長本店、(株)テラ、昭和テスコ(株)、

栃木電波システム(株)、ジャパンプアールシステム栃木、(株)屏風岩

発行 平成八年三月三日

発行所 宇都宮商工会議所

宇都宮市中央三十一一四

TEL 〇二八六三三七三三二

FAX 〇二八六三四八六九四

発行人 日向野 三郎

企画・編集 宇都宮雷都物語

事業本部

株式会社 エージーエム

